オンマリシエソワカ

T・ミーナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オンマリシエソワカ

【Ｎコード】
Ｎ８０２１Ｃ

【作者名】
Ｔ・ミーナ

【あらすじ】
心に闇を持つ中学生のムカゴは遠足の途中、橋から転落し班の仲間とともに江戸時代にタイムスリップ。大阪冬の陣を控えた隠れ里の忍術使いに助けられ、帰還をめざすも、仲間のひとりに裏切られ、ピンチに陥る。忌まわしい過去を捨ててしまいたいムカゴが「自分を生きる」意味を獲得するまでの心の葛藤を、壮絶な時代を生きる若い忍者との心の交流を通して描く。「児童文学ファンタジー大賞」大賞候補二度の実力を持つ著者渾身の歴史ファンタジー。２７話完結。

第一話　わたしはだれ

第一部　わたしはだれ。

誰かの悲鳴ではっと目がさめた。

ここはどこだろう。

樹木がいっぱい生い茂っている。

重なり合う小枝や緑の葉っぱ。そのすきまをぬって届く太陽の光がとてもまぶしかった。

山だ。それも深い山の中。

そんな深い山々にはさまれた、V字の底のような部分にわたしはいるのだった。

小鳥のさえずりと川のせせらぎ以外なにも聞こえない。

さっききいた悲鳴の主は誰？

夢だったのだろうか。思いだしただけで背筋が凍る。断末魔の叫びというのはきっとああいう声をいうに違いない。

おずおずとからだを起こした。

すぐそばを川が流れていた。岩にあたって砕ける水しぶきが綿雪のような渓流で、まるでカレンダーの中の風景写真を見ているようだった。

その少し先に滝が見えた。岩をまっぷたつに割って、そのあいだをまっさかさまに流れ落ちている。

とても静か。

ここはどこ。

なぜわたしは、こんなさびしい山の中にひとりでいるんだろう。

なにひとつ思いだせない。

なのに、いまいち考えようという気力がわいてこない。頭の芯がちりちりして、からだもだるい。ひどく疲れていた。そのせいかもしれない。

そばにあった、大きな岩にからだをあずけた。おとながしゃがんだくらいの大きさで、もたれかかるのにちょうどよかった。
せせらぎに耳をすましていると、自分自身が川の一部になって、とけて流れていくような錯覚に落ちた。ふわっと意識が遠のいて、やがてまた眠ってしまった。

次に目をさましたときには、からだがだいぶ回復していた。
太陽はすでにはじけるような輝きを失い、そのかわりに山全体をどっしりした厚みのあるオレンジ色で包んでいた。
山は日が落ちるのが早いという。
記憶は戻っていなかったが、とにかく下山しなければと思い起き上がった。
どっちへ行ったものか。
ぐるっと見回したが、道らしい道はどこにもみあたらなかった。山の斜面はどこも急で、樹齢千年を越すような巨木にみっちりとおおわれていた。とても登れそうにない。
川にそって下ることにした。
どんな川だって最後には絶対海にたどりつくのだし、というそんな軽い気持ちだった。

しばらく行くと、また滝の音がかすかに聞こえた。
もうこれで四つ目。
どうしてこんなに滝ばかりあるんだろう。
滝といっても、高さ何十メートルもあるような崖を、ドドドドッと落ちるようなものはないので、今のところは、こけむした巨岩に足をすべらせないように注意してなんとかおりられてはいるけど、いつなんどき、にっちもさっちもいかないような、ばかでかいやつが現れるんじゃないだろうかと、気が気じゃない。
四つ目の滝は双子だった。
滝に双子という言い方は変かもしれないけど、そっくり同じ形の

小さい滝がふたつ隣り合わせに並んでいた。
ふたつだから、遠くからでもあんなに大きな音がしたのか。
近づくにつれどれほど大きな滝なのかとどきどきしていただけに、実物を見てほっとするのと同時に、拍子抜けした。
手をつかわなくてもかんたんに降りることができた。
歩きだして小一時間はたっただろうか。時計がないのでわからないが、心なしか小石の角がとれて丸みを帯びてきているような気がする。
山をおりるまでに、あとどれくらい時間がかかるんだろう。行けども行けども樹木は自然のままの密に生い茂って、杉やヒノキなどが植林された形跡はどこにもなかった。
もしそういう場所を見つけたら、そこから林道に入れるかもしれないと期待してまっているのに。
双子滝の河原で休憩をとった。
手ですくって川の水を飲んだ。冷たくて硬い感じのおいしい水だった。
滝つぼは絵の具を何色も混ぜたような複雑な緑色をしていて、中に手のひらくらいのアマゴが何匹も泳いでいた。
ふと奇妙な気持ちになった。広さといい環境といい、キャンプをするのにこんなに恵まれた場所はほかにないのに、そこには、人の気配どころか、テントを張った痕跡さえもないのだ。
不安がざわざわとはいのぼってきた。
そのとき、遠くに水のはねる音を聞いた。はっとなった。しゃばっしゃばっと、人がつま先で水をけりあげながら歩く音。
すぐにわかった。実際に姿を見たわけじゃないけど、それがクマでも水鳥でもなく、人間であることが。
「助かった」
思わず叫んで、わたしはころがるように駆けだしていた。

1

第二話　記憶喪失

第二部　記憶喪失

その人を見てはじめて、わたしは、自分が身につけている服が学校の体操服であったことに気がついた。

襟ぐりと袖ぐりに青のラインが入った白のシャツに、紺色のクォーターパンツ。シャツの右胸には、学校の校章らしき、「中芦」のマークがプリントされている。靴はアシックスの完全白のスニーカー。靴下も完全白。

まったく、同じスタイル。たぶんわたしと同じ中学校の生徒。

なにをしているんだろう。反対岸の急な崖を向いて、枯れ枝のようなものを拾い集めている。作業によほど集中しているのか、わたしがうしろに立ってみているのにもまったく気づかなかった。

「すいません」

できるだけ驚かせないように、やんわり声をかけたつもりだったが、ひどくこわがせてしまったようだ。振り返った顔が恐怖に凍りついていた。

「驚かせてしまってごめんなさい」

あやまりながら、心の中ではほっとしていた。その人が女子生徒だったからだ。背が高く上半身ががっちりしているので、顔を見るまでは、てっきり男子生徒だと思いこんでいた。

だけど、どこかで見た顔。

「ム、カゴ？　あんたしゃべってんの」

「は？」

次の瞬間、彼女の手から小枝がすべり落ちた。

そのあと、狂ったようにわめきながら、岸に向かって駆けてきた。だけど必死にもがいても、流れのある深みでは思うようには前に進めない。もどかしくてたまらないという感じで、彼女はどぶんと頭

から突っ込んだ。
そしてあっというまにクロールで岸までたどりつくと、全身ずぶ濡れなのもかまわずに、わたしに抱きついてきた。
からだに触れた瞬間、彼女は「ああ」という吐息をもらした。それっきり、何も言わず、黙ってわたしのからだを抱きしめつづけた。人の体温が恋しくてたまらなかったのだという感じで、吸盤のように肌をぴったりと押しつけてきた。
しばらくして彼女がわたしからからだを離した。顔をあげたときには、さっき張りついていた恐怖もすっかり消えていた。
わたしたちは並んで河原にすわった。
「よかったムカゴ。生きててほんとによかった。声も戻ったね」
彼女はまずそう言った。小麦色に焼けた顔。真っ白い歯がこぼれた。
生きててよかった？　声が戻った？
意味がわからない。ムカゴというのは、わたしのあだ名？
「ねえ、ここ、どこだかわかる？　あれからもう丸一日たつのに、誰も助けにこないなんて変じゃない？　何かおかしいんだよね。風景がほんの少し違うっていうか。あたしたちいったい、どこまで流されちゃったんだろう。ムカゴ、ひとり？」
わたしがうなずくと、彼女はためいきをついた。
「あたしはこんなとき、あまり動きまわらない方がいいと思う。雪山で遭難したときも、助けが来るまで、その場でじっとしてるって言うじゃない」
遭難？
「遭難したの、わたしたち？」
「は？」
彼女はぎょっしたようにわたしを見て、目の前でひらひらと手を振った。
「もしかして、あなた、だいじょうぶ？」
「なにもおぼえてないの」

正直に答えた。わたしがおぼえているのは、目がさめてから山を下り、今ここにいる。そのたった数時間のことだけだ。
「からかってるとか、まさかそういうことないよね」
「うん」
彼女は絶句した。
わたしを見る目のたまだけが、そわそわと落ち着きなく動きまっている。
「まさか、自分の名前とかも」
「うん」
「住所、年齢、家族構成」
左、右、左、質問に一回ずつ首を振った。
「きっと、橋から落ちたときに、どこかに頭をぶつけたんだ」
「橋から落ちたの、わたしたち」
わたしの質問に、彼女は一瞬言葉を失ったようだったけど、すぐに気を強くしてわたしの手をとった。
「だいじょうぶ、すぐに助けが来る。信じよう」
彼女の声は勇気と希望にみちあふれていた。自分だって不安がないはずはないのに、そんなのおくびにも出さずに。とても強い人だと思った。
しっかりと包まれた手があたたかい。
だけど本音を言うと、わたしはたぶん、この人が心の中で想像しているほどには、記憶を失ったことをつらいと感じていなかったし、何が何でも助けがほしいと思っているわけでもなかった。
彼女が時々瞳の中に浮かべる同情の色にも、妙に違和感をおぼえ、そんな自分が不思議でならなかった。
片山大子。
それが彼女の名前だった。
大きい子と書いてヒロコと読むのだそうだ。
「名は体を表すって本当でしょ。みんなにはヒロって呼ばれてるの。よろしくね」

と言ったあと、これって春にしたのと同じ自己紹介だよ、と彼女はおかしそうに笑った。
わたしたちはクラスメイトなのだった。
芦原市立芦原中学校三年四組。
「それで、あなたの名前は向井和子。みんなにはムカゴって呼ばれている。とても無口でおとなしいっていうか、実は誰とも口をきかないんだ。だから驚いてる」
「わたし、なぜしゃべらないの」
「なぜって、本人に聞かれても」
ヒロは困ったような顔をして、「あたしが知ってるのは、小学生の時からずっとそうだったらしいっていうことだけ」
「へえ」
自分のことなのに、赤の他人のことを話しているような強い違和感。しゃべらないで、どうやって自分の気持ちを人に伝えていたんだろう。理解できない。
「変な人だね」
わたしが言うと、ヒロは少し間をおいてから、爆笑した。
ヒロは、最初のうちわたしが「ヒロ」と呼びかけるたび、いちいちわたしの顔をのぞこんで、目を丸くしたけど、たくさん話すうちに、慣れてそんなこともなくなった。
「ねえヒロ、わたしたちいったいどうしてこんな山の中にいるの？」
わたしがたずねると、ヒロは、「お滝まいり」の途中でわたしたちが巻き込まれた、八月二日の事故について語ってきかせてくれた。
「お滝まいりというのは、毎年夏休みに芦原中の三年生だけが取り組む、神庭山登山行事のことで、途中に点在するいくつもの滝に、高校受験合格を祈願しながら登るのでお滝まいりと呼ばれているんだ。
朝早く学校を出て、サンショウウオセンターがある五合目まではバスで登り、そこからは徒歩。渓流ぞいのけわしい山道には、神さまが宿っていると言い伝えのある滝が大小二十四あって、そのひと

つひとつに手を合わせながら進んでいくんだ」
「へえ」
「なんか思いだした？」
ううん。ぜんぜん。つまらない行事もあったもんだと思っただけ。
ヒロはがっかりした様子。
「あわてずあせらずあきらめず」
どこかで聞いたことのあるようなセリフを、ひとりごとのようにつぶやく。
「それで」
話をうながす。ヒロは続けた。
「あたしたちは同じ班だった。サンショウウオセンター前のお地蔵さんに集合したあと、予定どおり午前九時にスタートした。
一つ目は風車の滝という名前のついた、落下する水が途中で回転してるように見える滝。スタンプを押し、みんなでおまいりした。そして次のポイント、竜眼滝をめざしたんだ。つり橋をわたった。その下は深い渓谷だった」
なんか思いだした？
今度は目だけで訴えてきた。いいや、と首を振った。
「そのあと、なんだよね」
「なにが？」
「橋が突然燃えだしたの」
「え？」
一瞬耳を疑った。
「うそ」
「うそじゃない。本当に燃えたの。突然。わたしは班の一番先頭を歩いていた。すごい炎で、そのあと谷底にまっさかさま」
ふいに、荒縄で編まれたつり橋が燃えながら谷底に落ちていくイメージが頭の中に浮かびあがった。大きな岩に頭をごつんとぶつけて。
痛いっ、という感じまでしたけど、想像の域は出ない。

「まったくおぼえてない」
わたしが言うと、
「うらやましい」
ヒロが冗談っぽく笑った。
そんな目にあって、おかしくならないのもつらいもんだなと思った。
「わたしたち以外にも、橋から落っこちた人っているの？」
たずねると、えーっと、と言いながらヒロは指を折った。
「エリカでしょ、花田でしょ、それに政治」
「みんな同じ班だったんだ。あと、そこにたまたま久保先生もいた。なぜかは知らないけど、先に橋をわたっていたあたしたちを、血相変えて追いかけてきて、何か叫んでいて、そのあと突然橋に火がついたの。
ちょうど久保先生とあたしたちの間で、ぐわっと火柱が立ったという感じで、あとはもう何がなんだか」
「わたしたち以外の人はどうなったの」
ヒロは足もとの小石をひとつつかんだ。
うつむいて無言で握りしめている。
「人間だもん。死ぬことだってあるよね」
ヒロがつぶやいた。少し考えたが、どう考えても、わたしの質問に対するまともな答えとは思えない。
「はっきり言って」
わたしが言うと、ヒロはわたしの目を見つめた。
「でも、驚くよ」
「絶対驚かない」
きっぱりと答えた。
「わかった。じゃ、いっしょについてきて」
ヒロが立ち上がって手を伸ばした。その手をつかんで、わたしも立ち上がった。

1

第三話　ふたりっきり

第三部　ふたりっきり

河原からそう遠くはない笹の生い茂る藪の中だった。
案内された場所に、上下黒のジャージ姿の大柄な男性がうつぶせに倒れていた。周囲をハエがぶんぶん飛び回っている。
とっさに思いだしたのが、目をさます直前に聞いた断末魔の悲鳴だった。あの声の主だろうか。尾を引くような声に背筋がぞくっとなった。
「誰？」
とたずねると、
「久保先生」
という答えが返ってきた。
「この人が、くぼせんせい」
まったく思いだせない。
思いだせないことが幸いしているのだろうか。
死体を前にした自分は驚くほど冷静で、悲鳴をあげることもなければ、テレビドラマみたいに、ふらっと気を失うなんてこともなかった。
気がつくと、そっと手を合わせていた。
気の毒に。道に迷って崖からすべり落ちたのだろうか。
久保先生の死体をはさんで、ヒロは山側に、わたしは川側に立っていた。その場所から山上を見上げた。だけど急な斜面を人がすべり落ちたような跡はどこにもない。
「これ見て」
その場にしゃがみ、ヒロは久保先生のわき腹あたりを指し示した。
「なに」
ジャージに何か刺さっていた。

星の形の、鉄製の……。
え？
「うそ、まさかそんな」
「たぶんそのまさか」
抑揚のない声でヒロが答えた。
わき腹に二枚、太ももに一枚、久保先生のからだには、合計三枚の手裏剣が刺さっていた。
そして首筋には果物包丁くらいの大きさの刃物が一本。おそらくこれが致命傷となって久保先生は亡くなったのに違いない。
「いったい誰がこんなことを」
ヒロは首を振った。
こんな時代に手裏剣を使って人を殺すなんて、ふつうじゃ考えられない。犯人はぜったい頭が狂ってる。でなければ人間じゃない。
そのとき、ヒロがわたしの手を強く握ってきた。大きな手が小刻みに震えている。こみあげてくる得体のしれない恐怖とヒロも今必死で戦っているのだろうか。
わたしはヒロ以上の力で握り返した。
だいじょうぶだよ。だいじょうぶだからね。
心の中で一生懸命ヒロに伝えた。
それが通じたのか、しばらくすると、ヒロの手の震えが少しおさまってきた。わたしたちは無言で山をおりた。
「あたし、正直に言って、ムカゴがこんなに頼りになる人だとは知らなかった。よかった会えて。でなければひとりで今日一日耐えられたかどうか」
太陽がこわいほどの早さで、西の空に沈んでいく。
わたしたちは、なすすべもなく河原にすわりこんでいた。
すぐそばには、ヒロが木の幹や枝で組んだやぐらが、台風で中止になったキャンプファイヤーのようなさびしさで放置されていた。
ヒロの予定では、このやぐらに火をつけ、空に煙をまき上げ、その煙を救助のヘリが発見し、晴れてめでたしめでたしという筋書き

だった。
だけどそれにつける火がなかった。
夏の河原にはたいてい、釣り人やキャンパーの捨てていった百円ライターが何個か落ちているものだから、がんばってさがせばひとつくらいは見つかるだろう、とそう思ったのが甘かった。
さすが自然信仰の山というだけあって、神庭山のマナーは非常にゆきとどいていた。ライターどころか、空き缶ひとつ落ちてない。
そうしているあいだにも日はどんどん翳っていく。
カラスが鳴いている。ねぐらに帰ってきたのだろうか。うるさいくらい鳴いている。わたしたちが聞きたいのはヘリの音なのに。
助けのないまま、今日も一日終わるのだろうか。
まる一日なにも食べてない。川の水ばかり飲んでいる。胃袋はきっと水風船のような状態になっているのだろう。
そのとき、空腹で死ぬという可能性だってあることに気づいて、目の前が暗くなった。
「食べる？　最後の一枚」
ヒロがポケットからガムを一枚出して、わたしに差し出した。
「久保先生のポケットに入ってたんだ。ライターかマッチを持ってないかなって思ってさぐってたら、たまたま出てきたんだよ。生徒たちには、おやつ禁止っていってたのにね」
「……」
「え、なにその目。やっぱりいけないことだって思ってんの？　そりゃあたしだって考えましたよ。人のもの盗んで食べるなんていけないことです。わかってます。
だけど、死んだ人にもうガムはいらないでしょ。あのままアリにやるよりはいいかなって思って、先生にちゃんと手を合わせて」
「違うの。そうじゃないの」
わたしはヒロの言葉をさえぎった。
「どうしてなの」
「どうしてって」

きょとんした目でたずね返した。わたしの質問の意味がまるで理解できないといったように。わたしはびっくりした。何に驚いてるのかじぶんでもよくわからないけど、手していた箱をいきなりひっくり返されたような感じがした。

「はい、どうぞ」

「いらない」

「なんで」

「そんな大切な最後の一枚を、わたしなんかがもらえない」

「そんな大げさな、たかがガム一枚のことで」

ヒロは屈託なく笑って、わたしの手の上にガムをのせた。そのガムをわたしは紙のまま半分にちぎって、ひとつをヒロにわたした。ヒロは素直に受けとった。

ガムはブルーベリーの味だった。かむと、甘酸っぱい香りが口いっぱいに広がって、たった半分でもじゅうぶん満足できた。一回一回味わってかんだ。かんでいるあいだ、なんども、うれしいと思った。ガムで空腹をごまかせたことより、ガム以外の何か大事なものをヒロからもらったという喜びが大きく、それがなによりうれしかった。

言葉で説明すると、何かから解放されたような気分だった。だけどそのまま口にしたところで、またそんな大げさなと笑われるだけだと思い、黙っていた。本当はうれしさのあまり涙までこぼれていたのだけど。

すっかり暗くなると、どちらから言い出したわけでもなく、ヒロのたてたやぐらに身を隠すようにして、ふたりでからだをよせあった。

「花田は運動はからっきしだめだけど、とにかく勉強ができるんだ。ここに来るバスの中でも、みんなが歌で盛り上がっている最中に、ひとりだけ、ポケットサイズの［入試によく出る　歴史重要用語辞典］なんてのを読んでた。

例えばあたしなんかがそんなことすると、熱でもあんの～って、

感じだけど、花田だと誰も何も言わないんだよね。ありふれた光景っていうか。
おやじが医者で、かあちゃんが大学教授。兄貴は京大の医学部。
で、あいつの場合、高校はなにがなんがなんでも、N大付属に合格しなきゃなんないんだって。そんなやつ」
クラスメイトのことを教えてほしいと言ったら、同じ班だった人のことを順番に教えてくれた。
エリカは、自分の思いどおりにならないと、すぐにぷっとふくれるタイプ。ちょっとあんた、何さまのつもり？　って感じ。思ったことは何でもずけずけ言うので、トラブルも多い。
だけど、超わがままでも、甘え上手のせいか、なんか憎めないのだそうだ。彼女の頭の中は、高校進学よりも、芸能界にデビューすることでいっぱいらしい。
政治は、自称エリカファンクラブの第一号にして名誉会長。
じいさんは国会議員で、とうちゃんは県会議員。それでもって、政治って名前をつけられた自分も、将来は政治家になるつもりでいるらしい。
バカのくせに。
そう言ったヒロは、この政治って子が嫌いなのかもしれない。
金と親の力で何でもできるって思いこんでるんだとも言った。
ヒロのおなかが鳴りつづけている。
あまりに接近しすぎて、自分のおなかがなっているような錯覚を起こす。
明るい月が川面で揺れていた。
かさかさと木の葉のこすれる音に、ヒロのかすかな寝息が混ざる。
しばらくその規則正しい音に耳を傾けていた。
「ムカゴ」
突然ヒロがわたしを呼んだ。
眠っていたとばかり思っていたのでびっくりした。
「起きてたの」

1

「ううん。寝てたの。だけど夢の中で、ムカゴにありがとうって言い忘れたことにはっと気がついて目がさめたんだ。ありがとうね、ムカゴ」

なんのことだかさっぱりわからない。わたしがあっけにとられているあいだに、すぐにまた眠りに落ちた。

ねぼけてたのか。いったいどんな夢を見ていたんだろう。わたしの腕を枕にして、大きなからだを丸め、すやすや寝息をたててていた。

第四話　政治の出現

第四部　政治の出現

「おはよう」
ようやく目をさましたヒロに声をかけた。
「なにやってんの、そんなとこで」
ヒロはわたしを見て、不審そうに目を細めた。
それもそうだろう。わたしは下着姿で靴を抱え、川のどまん中に突っ立っていた。
「魚をとってるんだけど。うまくいかない」
雲ひとつない青空。魚を焼く準備はできていた。
苦労して運んだ大きな四個の石を、できるだけすきまのないように箱型に並べ、その中に小石を敷きつめた。竹やぶに入って、魚の串になりそうな枝も数本拾い集めてきた。
「生で食べるつもり」
ヒロが顔をしかめた。
「まさか。マッチを持ってたの、わたし」
ヒロは驚いて、わたしの脱いだ服に目をやった。たたんだ体操服の上にマッチがある。
ヒロは手にとって中みをたしかめた。
「だいじょうぶ。湿気てなかった。念のため、一本すって確かめた」
わたしは岸にあがった。ヒロが起きてくるまでに一匹は捕まえておきたいと思ったのに、かなわなかった。
「すぐに助けを呼ぶのもいいけど、迎えが来たときには、餓死してましたじゃ困るでしょ。まずは腹ごしらえをと思って」
ブラジャーとパンツ姿、手にスニーカーをぶら下げたわたしを見て、ヒロはぷっと噴き出した。
「おかしい？」

「ううん、おかしくない。すごく正しい」
「じゃあなんで笑うの」
「だって、ムカゴがそんな人だったなんて、っていうか、もう慣れないとね。新しいキャラに」
「そうだよ」
「そうする」
ヒロは、ぱっぱっぱっと服を脱いだ。
筋肉の盛り上がったアスリートのような美しい背中と肩。靴下を脱ぐのももどかしいって感じで、せっかちに走りながら脱ぎ捨て、どぶんと川に飛び込んだ。大きな水しぶきが上がった。
朝の太陽の光で川はきらきらと輝いている。その川底を腰を使いしなやかに泳ぎまわるヒロは、まるで人魚のようだった。
いや、河童か。
「泳ぐのじょうずだね」
水面にぷはっと顔を出したヒロに言った。
「二百メートルバタフライ、全国大会六位入賞。朝礼のときに校長に表彰されたんだけど。おぼえてないよね」
「すごい」
「って、そんな自慢してる場合じゃない。ね、靴投げて」
やっぱり靴で捕るつもりなのか。
「大きいの頼んだわよ」
ヒロに向かって、学校指定のスニーカーを放り投げた。

考えたら靴なんかで捕まるような魚がいるはずがないのだ。
魚は結局別の方法で捕まえた。いわゆるモリを作ったのだった。
昨日、久保先生の首に突き刺さっていた鋭い刃物、あれを山で拾った物干し竿のような太さの竹の先にゴムでくくりつけた。
ゴムは久保先生のジャージのズボンから抜いた。
これが思った以上にうまくいった。
魚は巨大な岩の下にうじゃうじゃいて、それをヒロが突いて突い

て突きまくった。
ヒロが捕まえて投げてよこす魚に、わたしは、ひたすら竹串を刺しつづけた。本格的にじぐざぐに刺すのは難しかったけど、鉛筆を削るように先をぴんぴんに尖らせた長目の竹串で、魚のからだを斜めに抜いた。
ちょうど六匹目を刺しおえたとき、ヒロが戻ってきた。
「何ていう魚？」
「アマゴ」
ふたりで竹串を地面に立てる。
そのあとヒノキの枯れた葉っぱで火をおこして、あとは遠火で時間をかけてじっくり焼いた。
待っているあいだ、ふたりともひとことも話をしなかった。
だんだんと焼けていく魚のいいにおいが、猛烈に食欲を刺激して、ほかのことを考える余裕がなかったのだ。
お互いのつばをのむ音だけが耳に届く。
魚の皮がじゅうじゅうと焼けてめくれるのを見たときには、感きわまって思わず泣いてしまいそうになった。

背後に人の気配があった。
ふたりとも山を背にすわっていたので、その姿が実際に見えたわけではない。だけどヒロも気づいたようだ。
わたしたちは、ほぼ同時に顔を見合わせた。
魚を三匹食べおえて、ちょうど人心地ついていたときだった。
食べている最中は、こんなにおいしいものは食べたことがないと、がつがつと貪っていたくせに、たった今は、やっぱり最低塩は必要だよねとか、内臓はとった方がよかったかもね、などと好き勝手なことを言い合っていた。
久保先生に手裏剣を投げて殺した変質者のことが脳裏をよぎった。
わたしはモリを手元にひきよせた。考えたら、このモリの先についた刃物は、その変質者の所有物だった。

返せと言ってきたのでは。
まさか。
背中にいつ手裏剣が飛んでくるのかと思うと、息もできなかった。かといって振り向いたら、すぐにまた別の刃物で、ひゅんと首を切られるかもしれない。
いざとなったら、このモリで戦うしかないだろう。
冷や汗がたらたらと顔を流れた。
「片山、か？」
その声に、ヒロがはっとなって腰をひねった。
「政治！」
振り返るとそこに、泥だらけの体操服を着た、きつね顔の男子生徒が呆然と立っていた。

1

第五話　ここは江戸時代？

第五部　ここが江戸時代？

「あのねえ、誰があんたのそんなアホな話、信じると思う？　ましてやこの理知的なヒロさまを相手に」

ヒロは政治に背中を向けて話している。政治も向こうをむいてすわっている。わたしも服を着て、ヒロも靴下をはきおわると、もういいよと言ってこっちを向かせた。

「かついでんじゃないわよ。来てるんでしょ、救助の人。正直に言わないと、こうよ」

余裕の笑みを浮かべて、ヒロは手製のモリで政治を威嚇した。

「ほんとだって。見たんだよ、この目で。ここは現代じゃない。江戸時代なんだ」

それでもなお政治の目は真剣で、とてもうそをついているようには見えない。

アホな話とはこうだ。

昨日の朝、気がついたとき、政治はどこかの河原で倒れていた。そのすぐ近くで花田がうつぶせに、エリカがCの字に丸まって倒れていた。声をかけて抱え起こすと、エリカが少し水を吐いた。だけどふたりとも意識は、はっきりしていた。

岸から少し離れた山の中に、樹木を伐採したあとがあって、行ってみるとなんとか下山できそうな道がそこからのびていた。

熊笹におおわれた、いつクマに襲われても不思議ではなさそうな頼りない山道だったけど、三人は声を限りに叫んだり歌ったりして、励ましあいながらなんとか山をおりた。

目の前に田園風景がぱっと広がった。田んぼの中で腰をかがめて農作業をしているお百姓さんたちがいる。ラッキー。携帯を借りてうちに電話しようと思った。今すぐタクシーよこせって。で、いち

ばん近くにいたひとりに声をかけた。
「その人たちが江戸時代の農民だったっていうの」
けっという感じでヒロが吐き捨てる。
「そのときはまだ、変な道を下っちゃったせいで、なんかすっげえ田舎に出ちゃったな、という程度のものだったんだけど」
「ロケだったんだよ。なんかのロケ現場。暴れん坊将軍とか、水戸黄門とかの」
「それも思ったさ」
政治はためいきをついた。
「エリカなんかさ、話のまったく通じない相手に、役になりきってますねえ、なんてため口きいてさ。そのへん、カメラさがしまくってた」
「で」
「その人に花田がたずねたんだ。今は何年ですかって」
「そしたら」
「慶長十九年だと」
「なにそれ」
「花田いわく、１６１４年」
「せん、ろっぴゃく、って、そんなまさか」
「そのうち、農作業の手を止めてまわりに人がたくさん人が集まってきたんだ。それこそ時代劇に出てくるような、変なマゲの人たちばっかし。でさ、なんかひそひそと相談し始めたわけ」
「それで」
ヒロの声にはまだ余裕がある。あごをしゃくって先をうながした。
「背中の曲がった村長って感じのじいさんが、突然、田んぼぞいの道に向かって手を振ったんだ。そこにいた連中に合図したんだ」
「連中って」
「それがさ、どういやいいんだろ、あっそうだ、おまえさ、あの映画見た？　ビートたけしの座頭一」
「見たけど」

「あの中にさ、人を殺すのなんか屁とも思わないような、いかにも極悪非道の侍くずれみたいのがいっぱい出てくるじゃん。そういう連中だよ。そういうのが三人、地面に刀を突きつけて、この道は虫一匹通さん、みたいなおそろしい顔で道端にすわってたんだよ。こっちを見て、ゆっくりと腰を上げたときには、、まじ、しょんべんちびりそうだった」

「あんたのしょんべんなんかどうだっていいの。それからどうしたのよ」

「そのあと突然、花田が踊りだした。手足をひゃあひゃあばたつかせて、おかげまいりおかげまいり、って叫びながら」

「は？」

「頭が変になったのかと思ったよ」

こんな感じ、といって政治はそのときの様子を再現してみせた。テレビで見た阿波踊りと雰囲気が少し似ていた。踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らなそんそん、の部分が、おかげまいりの連呼になっていた。

その様子を言葉もなくヒロが見つめている。政治が踊りをストップした。

「花田の奴、俺にもエリカにも、同じように踊れって、言うわけよ。早くって、わけでやったさ。とにかく必死、無我夢中。わけもわからず、花田の後ろを、おかげまいりおかげまいりって、叫び踊りながらついていった。ダンスの選手権で近畿ブロックまで進んだだけって、さすがにエリカはうまかったな。

俺たちは急な階段を上って、山の中のもときた道を引きかえていった。不思議と誰も俺たちを止めなかった。追いかけてもこなった。花田がいいと言うまで振り返るな、踊りをやめるなって言うから、そいつらの様子とかは、わからなかったけど」

「あんたいったい、あたしをだますために、いくら賭けたのよ」

「まだ信じないのかよ。じゃあこの腕、見てみろ。何時間も踊りつづけて、これ以上、上がらないんだからな」

政治は途中まで腕を上げて、いててて、と顔をしかめた。
「おかげまいりって」
「よく知らないけど、どっかの神さまにお参り行くことだって。そうやって叫んで踊りながら旅して行くらしいけど、そういう一行には、何があっても手を出しちゃいけないんだってさ」
「作り話にしてはできすぎてる」
「だからさっきからそうだと言ってるだろ」
むかむかした顔で、政治がわたしを振り返った。なぜかはっとして、
「おっ、おい、こいつの、顔、どうしたの」
え、と言って、ヒロもわたしを振り返った。やはりはっとなった。口をぽかんとあけて、わたしの顔を見つめている。
「まさか、いっしょにいて気がつかなかったのか」
「う、うん。顔は気づかなかった。声にもっと驚いたから」
「声？　出んの」
「うん」
「信じられねえ。ほんとか、なんかしゃべってみろよ」
政治が下からわたしの顔をじろじろとのぞきこんできた。なんて失礼な人間なんだろう。バカのくせにと言ったヒロの言葉が胸をよぎる。
「バカ」
「バカあ？」
政治が繰り返すと、ヒロがぷっと噴き出した。
「このムカゴと、あのムカゴが、同一人物とはね」
「わけわかんないや」
「ね、ヒロ、わたしの顔って？」
ヒロはさっきの「バカ」でまだ笑っていて、わたしが腕をつつくと、我に返ったようにわたしを見た。
「あ、ああ、実はさ、アトピーがすっかり消えてるの」
アトピー？　なんとなく自分の顔に手をやった。べつだん何もな

い。ふつうにつるつるしてる。これがいったいなんだって言うの。
「ひどかったんだよ、見ててかわいそうなくらい」
「そうそう、血がにじんで、ずるむけの。まるでスイカを叩きわったみたいな、ホラー仕立ての顔」
「政治！」
「さっきの仕返し」
ホラー仕立て…？
わたしって、そんなに醜かったんだ。
気にすることないとヒロが声をかけてくれた。
ぜんぜん気にしてなかった。ただ、驚いてただけ。ひとごとみたく、かわいそうって、思ってただけ。しゃべれない、醜い少女。それはわたしじゃない。
「とにかくみんなのところに行こう。行ってこれからどうするか知恵をしぼるんだよ」
政治が立ち上がった。
ヒロが手製のモリをつかんで立ち上がった。とがった刃先が、まっすぐ上を向いていた。

1

第六話　ムカゴじゃない！

第六部　ムカゴじゃない！

川ぞいを上流に向かう。

ふたごの滝を越えて、さらにいくつも滝をさかのぼった。それはわたしが昨日たどったのとまったく正反対の道。わたしが横たわっていた河原を少し上がったところから、背丈ほどもある雑草を分け入って山の中に入った。

山の斜面は急で樹木が密に生い茂っていた。頑丈な木の根っこや、幹に巻きつく蔓をたよりに、山肌をはうようにのぼる。

少しのぼったところで、突然視界が広がった。樹木がまとめて伐採されているせいで、そこだけぽっかりと広場のようになっているのだった。

教室くらいの広さはあるかもしれない。たぶんさっき政治がわたしたちに話していた場所なのだろう。

朽ちた切り株に誰かがすわっていた。

向こうむきなので顔はわからない。

「エリカ」

とヒロが呼びかけると、はっと振り返った。大きな目をいっぱいに見ひらき、しばらく無言でみつめていたかと思うと、突然顔をぐしゃぐしゃにして泣きだした。

リュックは見つからなかった、などと政治が花田に話している。政治はなくしたリュックをさがしていて、偶然わたしたちを見つけたらしい。

リュックの中にはお弁当、そのほかにこの周辺の地図、腕時計、エリカの携帯電話などが入っていた。話は久保先生の死体のことに及ぶ。

エリカはなかなか泣きやまない。
いつまで泣いてるつもりなのか。泣いてたって、何の解決にもならないのに。起きてしまったことを嘆くよりも、この先どうするかを考える方が大切なのに。そんなこともわからないんだろうか。
だけどヒロは、そんなエリカの背中を根気よくさすりつづけている。
本当にやさしい人なのだ。
「おなかすいた」
泣くだけ泣いて、ようやくエリカが顔をあげた。
「政治ったら、ぜんぜん頼りにならないんだもん」
聞き捨てならないという感じで、政治が首をつっこんできた。
「だからリュックをさがしにいってたんだろ。エリカが携帯携帯、携帯がないと生きていけないってうるさく言うから」
「だけど結局見つからなかったじゃん」
「見つかったってどうせ使えねえよ」
「それでもいいの。いつもそばにないといやなの」
エリカはぷいっとそっぽをむいた。ちえっと政治が舌打ちをする。エリカは、わたしが話を聞いて想像していた以上の、おそるべき傲慢わがまま娘だった。
「よしよし、おなかすいてるんなら、あたしがあとで魚を捕まえて焼いてあげる。ムカゴとさっき食べたんだけど、ここの川魚、まあまあいけるんだよ」
そう言って、ヒロがモリを手元に引きよせたときだった。
「そっ、それは！」
突然花田がのけぞって指をさした。ささささっと四つんばいではってきて、鼻先をくっつけるようにモリの刃に目を凝らした。
「どこでこれを？」
わたしとヒロは顔を見合わせた。ヒロが久保先生の首に突き刺さっていたことを、言いにくそうに白状した。
「これは苦無と呼ばれる、忍者必携の道具です。攻撃以外にも土を

掘ったり、屋敷に忍び込んだり、はしごを固定したり、あらゆるシーンに活躍するので、よく使われていたそうです」
「く、ない？」
政治はおかしな発音で繰り返した。
「はい、苦しむの苦に、無理の無と書いて、くない。社会の歴史便覧にも写真が載ってました。たぶん本物でしょう」
「歴史便覧？　そんなのあったっけ片山」
「さ、さあ」
ヒロは頬をぴくぴくさせながら、首をかしげた。
おもちゃじゃないの。だとしたら、あの手裏剣も本物ってこと？
モリの刃先にそおっと手を触れた。忍者の道具なんて始めてみた。こんな特殊なものをふつうの人が持っているとはとても思えない。
久保先生を殺したのは、頭のおかしな変質者だろうと思っていたけど、そうじゃなかったのか。
とすると、ここはやっぱり江戸時代？
「ムカゴ」
ふいにエリカがわたしを呼んだ。
その呼び方がわけもなく横柄だったので、似た調子で、なに、と答えると、あからさまに嫌な顔をされた。まさしく、何さまのつもりって感じ。
「ヒロにちょっと優しくされたからって、あまり調子にのらないでね。わかった？　勘違いしないこと」
露骨なくらいさげすんだ視線で、わたしのことをじろじろと眺め回した。
「返事は？　前はしゃべれなくても、もっと素直で、うんとかすんとか、首くらいは振ってたわよ」
何も答えなかった。というか答えようがなかった。
「あんた、本当に記憶がないの。うそついてんのかと思った。ふうん。見れば見るほど不思議。口がきけて、あの汚いアトピーもきれいに消えて、あんた、本当にあのムカゴ？」

こんどはもの珍しい動物でも見るような目。
「それでもやっぱりあんたはムカゴだよ。ムカゴは死ぬまでムカゴなんだから。おぼえときなさい」
ムカゴは死ぬまでムカゴ？
自分という人間をまるごと否定された気分。
ここまで人に言われるわたしって、いったい何？
「ねえねえ、花田、ムカゴのアトピー、なんで消えちゃったの」
ころっと態度を変えて、今度は花田に話しかけた。
「うーん。そのことに関しては、実はぼくもずっと不思議だったのですが、仮定として考えられるのは、向井さんのアトピーの原因となっていたのは、空気の汚れ、つまり大気中に含まれている排ガス等の化学物質で、それが除去されたことによって、本来の美しさが」
とそこまで言ったところで、花田ははっとなった。顔を真っ赤にして、下がってもない丸めがねの縁をくいっとずりあげた。
「うん。たしかにかわいいかも」
と政治の視線。
「ちょっと」
政治に向かって振り上げようとしたエリカのこぶしを、ヒロが止めた。
「やめなって。あのさ、さっきも話したけど、ムカゴは事故のショックが大きすぎたのか、どこかに頭をぶつけたのか、理由はわからないけれど、記憶が一部とんでるんだ。たぶん一時的なものだと思うけど、ちゃんと医者に診てもらうまでは、そっとしておくこと。このことを約束してほしい。本人を不安にさせるような言動は絶対慎む」
「不安にさせるような言動？」
エリカのモデルのように美しい眉がぴくりと動いた。
「たとえば、この人が、クラスの中でいじめにあっていたとか」
エリカがわたしに笑いかける。完全に人をばかにしたような目。
もう我慢できない。「ちょっとあんた」

エリカにどなりつけた。
「あなた、頭がおかしいんじゃない。さっきから黙って聞いてりゃ、やれおながすいただの、ヒロとなれなれしくすんなだの。なんなのそれ。わたしが誰と仲良くしようがそんなのわたしの勝手でしょ。おなかがすいたんなら、自分で食べ物くらい探しにいくのが当然でしょ。ほら行け。ほらほら」
モリをエリカの胸元にぐいぐい押しつけた。
「なんですって」
エリカが逆上して立ち上がった。きっとなってわたしをみおろし、
「ムカゴのくせに」
「そんな人、わたし知らない」
わたしも立ち上がって、きっとにらみ返した。
「言いたけりゃなんでも言うがいいわ。わたしは不安にならない。だってわたしはムカゴじゃないだもん。だから、死ぬまでムカゴだなんて、ありえない。変な言いがかりはやめて」
ふんっと顔をそむけた。
「むちゃくちゃやん」
政治がぽつっと口にした。
むちゃくちゃなもんか。
わたしは、自分の言ったことがおかしいなんてこれっぽっちも思ってなかった。みんなが驚いているのは、みんながムカゴのことを知っているからであって、わたしはムカゴなんて知らないのだから。
言いがかりだ。
「わかった」
ヒロが言った。やさしい、いつもの人を許す声。
「こうしない？　ムカゴのこと、今日はじめて紹介された友だちとかって思うの。過去の情報も何もない、親の都合で引っ越してきた新しい転校生みたいな」
「そうしましょう。それがいいです。お互いのため」
エリカとわたしを交互に見て、花田が言った。

わたしはそれでいい。だけど、エリカはといえば、悔しくて涙も出ないって感じで、全身をわなわな震わせていた。鬼のような形相で、怒りで浮き上がったこめかみの血管がびくびくとけいれんしている。

「違う。なにがあってもムカゴはムカゴなのよ」

歯ぎしりの間から漏れるような声で、エリカが言った。

なんなの、わたし。

っていうか、ムカゴってやつ。

なんでいじめにあってた？

しゃべれるのに、なんで口をきかなかった？

アトピーで顔が醜かったから？

それでいじめられるから？

なんなの。弱すぎ。理解できない。

おまえなんか、わたしの前に二度と姿を見せるな。

1

第七話　本領発揮

第七部　本領発揮

「ほいっ、また捕れた」
ヒロが水面から顔を出した。高く突き上げたモリの先で、手のひらサイズの魚がぴちぴちはねている。
「すごいですよ。片山さん。これでもう十匹目ですよ。さすがは北京オリンピック候補といわれるだけのことはあります」
花田が手を叩いて喜んだ。
わたしと花田は河原で石を集め、火をおこす準備をしていた。政治とエリカは食べられそうなきのこや木の実を探しに山に入っている。
V字に深く切り込んだ谷間は、本当に日が暮れるのが早く、ついさっきまで真上にあった太陽は、もう勢いを失ってかげりをみせ始めていた。
「ヒロ、魚はもういいんじゃない」
何度でも潜ろうとするヒロを止めた。ただでさえ冷たい水だ。つらくないわけがない。上がってすぐに火をおこしてやりたかったが、マッチには限りがあった。
狩猟組が魚の捕獲をやめたちょうどそのとき、採集組も山から戻ってきた。政治は赤い実をつけた枝を数本腕に抱え、エリカは体操服のすそに何かを包んでいた。
「これ、くえると思う？」
素手でどうやって折ったのかと思うような太い枝を、政治は下に置いた。
枝のいたるところから、小指の先くらいの赤いつるつるの実が、飛び出している。
「わあナツグミだ」

思わず笑顔がこぼれた。
いつどこで食べたか忘れたけど、その甘ずっぱい味を舌がよくおぼえていた。
「じゃこっちは」
エリカがぱっと手を離すと、体操服のすそから、黄色い実をつけた草のかたまりがぱさっと落ちた。とげがたくさんついていて、手では持てなかったらしい。
「モミジイチゴ。だいじょうぶこっちも食べられるよ。野生のイチゴは、赤よりも、黄色の方が甘くておいしいんだ」
口が勝手に答えていた。不思議。どうしてこんなことまで知っているんだろう。
「ほんとだ、うまい、ムカゴすごいよ」
政治が黄色い実をほおばった。大げさなくらい感激してる。すごいのは、わたしではなく、モミジイチゴなのに。
「ムカゴさん、助かりました。ぼくたちには、毒かそうじゃないかの見当さえつかないんですから」
花田もナツグミのつるつるの実を口に入れた。
「ああ、甘いです」
「そういえば、火をおこす手際も、川魚の串刺しも、素人とは思えなかったし、親によくキャンプとかつれていってもらってるのかもね」
河原に寝そべってからだを温めていたヒロが微笑んだ。
「そうなのかなあ」
言われるとそうかもしれない。
たった今も、ヒロの捕った十五匹の魚の内臓を取り除くためにちょうどいい大きさの石を探していたところだった。生きたまま魚の腹を裂き、内臓を取り除くことには、不思議と何の抵抗もなかった。
以前、このやりかたを誰かにおそわったのだろう。
父か母か。
両親らしき人が頭に浮かんだが、たぶん想像上の産物。肝心の顔

の部分にもやがかかってよく見えない。
「かわいいかわいいムカゴさま。これからもおいしい食い物をたくさん教えてくださいませ。そして我らを飢え死にから救いたまえ。アーメン」
政治がわたしに向かって拍手を打った。
横でヒロがあきれている。
「まったく調子よすぎだよ。これまでさんざんムカゴにいやがらせ重ねてきてさ。それがどう、役に立つってわかったとたん、手のひら返したように、ぺこぺこぺこぺこ。これじゃあまるで拝金主義のわいろ役人。血筋ってほんとおそろしいわ」
「それ、おやじに言ってやって。たぶん泣いて喜ぶと思うよ」
政治の横顔が卑屈にゆがんだ。
ふと気がつくと、エリカの機嫌が最悪だった。そこだけ空気がよどんでとぐろを巻いている。理由はたぶん、わたしばかりが注目を浴びているから。
「エリカも食べたら。イチゴ甘いよ」
気をつかってヒロが声をかけた。
「いらない」
「やせがまんすんなよ」
「そうですよ。糖分は疲れたからだを癒しますから、どうぞ」
「いいってば。フルーツならうちで食べるからいいもん。そんな道に落ちてたもん、汚くて食べたくない。おなかこわす。ママにしかられる」
そのあと誰もエリカに声をかけなくなった。
しばらくすると、おなかがすいたと言ってしくしく泣きだした。

3

第八話　超危険な山　大坂冬の陣

第八部　超危険な山　大坂冬の陣

昨夜よりもわずかに太りぎみの三日月が、水面で静かに揺れていた。

この月が満月になるころ、わたしはどこから月を眺めているだろうか。

ふと絶望的な気持ちになって、深いためいきが出た。

今日もなんとか生きのびました。

まさにそんな感じの夜だった。

「ねえあたしたちいったいいつになったら、うちに帰れるの。汗で気持ち悪い、シャワー浴びたい、シャンプーしたい。髪がバリバリ。ヘアパックもしたいよお」

生臭いったらありゃしない。自分のからだをくんくんにおっていたエリカが不満を爆発させた。

じゃあ魚なんか食べなきゃよかったのに。ひとり三匹の焼き魚を、魚が苦手という花田の分まで合わせて、エリカは五匹も食べた。おなかがふくれたとたん、元気になって本来の傲慢さも取り戻した。

「うるさい。黙れ。どうだっていいだろ、髪のことなんか」

政治がどなった。

これからどうしたらいいのか、魚を焼いた火を大事に囲んでの、作戦会議の最中だった。

「どならないでよ。あたしが言いたいのは、早くなんとかしてってことなの。なによ、政治なんか、学校ではあたしのこと、好きだ好きだって騒いでも、いざとなったらなんにもしてくれないじゃない。がっかりだよ。こんなことなら林君にしとけばよかった」

「なんだよそれ」

「それがいやだったら、今すぐあたしの携帯さがしてきて」

「やめなさい」
ヒロがふたりのあいだに割って入った。
「エリカ、あんたが悪い。そんな自分勝手なわがまま、ここでは通用しない。携帯も、ヘアパックのことも、今は一切口にしない。わかった」
「どうして、口にするくらいいいでしょう。本当にあたし、気が狂いそうなんだもん」
ヒロが首を横に振ると、エリカは黙ってうつむき、あたかも携帯でメールを打っているかのように親指を動かしはじめた。
届くはずもないメール。目に見えない携帯。それでもエリカは一心不乱に打ちつづけている。
エリカ抜きで話し合いが再開した。
「とにかくぼくらが橋から転落したあの場所を一刻も早く探しだすことです。そこにきっとヒントがあります」
「もとの世界に戻れるヒント」
「はい。ぼくらがつり橋から落ちた、どこかあのあたりに、この世界と向こうの世界をつなぐタイムトンネルがあったのでしょう。急いでそのトンネルを探さないと、とにかくこの山は今大変危険な状況にあるのです。いつなんどき、久保先生みたいな目にあうとも」
とそこまで言って、花田はポケットからミニサイズの本を取りだした。
［入試によく出る　歴史重要用語辞典］。
ああこれがきっとヒロが話していた、バスの中でも読んでいたという参考書か。水に濡れて全体が異様にふくらんでいた。
ふとページを繰る手が止まった。花田は顔を上げて言った。
「昨日山をおりたとき、ぼくらが出会った村の長老みたいな人は、今が慶長十九年だと言いましたよね。おぼえてますか」
「もちろんおぼえてるさ。あの目つきの悪い浪人たちのことも」
政治が答えた。
「あの道はたぶん、浅野の城下町に続く要所の道なのだと思われま

す。そしておそらく、あの目つきの悪い浪人たちは、豊臣の密偵を浅野城下にもぐりこませないようにするために、城が雇った用心棒。警護の者らでしょう」
「浅野城って、遠足でソフトバレーをした、橿原市のあの城跡」
「はい。この時代、大阪より西方、橿原一帯を治めていたのは、おそらく浅野城城主浅野弘政だと思われます。浅野弘政は、関が原の戦いで東軍として戦さに参加し、その恩賞としてこの地を徳川家康より与えられました」
「じゃあ、それまでは別の領主が」
「はい。芦原重正という大名の領地でした。重正は、関が原の際に、西軍として参戦しましたが、破れ、その後、お家断絶領地を没収されました」
「小学校の総合の町調べとかで、なんとなく聞いたことがあるような」
「たしか、神庭山のどこかに、隠れ里とかってあるんじゃなかった？　その芦原なんとかっていう人の家臣が逃げ込んで作ったとかいう」
「はい。そのとおりです。重正の家臣らは、いつの日か切腹に処せられた殿の無念を晴らそうと、浅野の目を逃れ、山に入りました。そこで逃げ延びてきた西軍の落ち武者らとともに、隠れ里を築き、徳川幕府転覆の日をひたすら待ったと伝えられています」
「そういえば、先生が配ったお滝まいり資料集のどこかにも、そんなような伝説が書いてあったな」
「政治君、これは伝説じゃありません、史実です。そしておそろしいことに、今１６１４年なのです」
「何がおそろしいの」
花田は参考書のページをまた先にぱらぱらとめくった。
「つまり、もうすぐ大阪冬の陣」
目の前に差し出し、ここです、と指さした。
「政治君読んでみてください」

花田に言われて、政治がしぶしぶといった感じで声に出して読んだ。
「☆関が原以降の豊臣氏。豊臣秀吉の子、秀頼は、関が原の戦いのあとも、大阪城を本拠とし、西国の諸大名に影響力を持っていた。１６１４年大阪冬の陣。家康は徳川氏への対抗をやめない大阪城を攻めた。いったんは講和がなったが、翌年大阪夏の陣で、ふたたび大阪城を攻撃し、豊臣氏を滅ぼした。以降太平の世に」
政治は何度も花田に読み方を注意されながら、なんとか読みとおした。
「今が八月、ここに書かれてある大阪冬の陣の三ヶ月前だとすると、徳川転覆を夢見てこの山のどこかにこもっている重正の家臣たちは、東西の決戦が近いことをすでに知り、これでようやっと殿の無念が晴らせると、色めきたっていることでしょう」
「それがどうかしたか」
「まだわからないのですか。その動向を、徳川、浅野がぼんやり指をくわえてみていると思いますか」
「あ、そうか」
ヒロがはっとひらめいたように言った。
「それで昨日の、極悪非道の用心棒」
「そうです。どっちがいつ襲ってきても不思議ではない、この地は今、爆弾を抱えているような状況です。そんな場所で、ぼくらは突然迷子になってしまったのです」
「迷子？」
ふとエリカが顔を上げた。今の今までどこかに架空メールを飛ばしつづけていたのに、なぜかそのひとことに突然反応したのだった。
「ねえ明日もう一度山をおりようよ」
その意見にはみんな愕然とした。たった今、花田が山をおりる危険をといたばかりではないか。
「そして警察に強力してもらうの」
「け、けいさつ？」

「あ、この時代は警察っていわないか、ま、よくわかんないけど、町に行けばあるんじゃない、そういうとこ。だって、相手は子どもだもん。ちょっとくらい不審に思っても、突然切り捨てられるようなことないって。時代は違っても、ここは日本。親切なおとなが必ずいて、話を聞いてくれて、お風呂だって入れてくれるって」
「ばかやろう」
政治がどなった。
「なによ突然」
「ばかだからばか。おまえ、花田の話、ぜんぜん聞いてなかっただろ。これから冬の陣が始まろうってときに、誰が得体のしれない迷子の世話なんか引き受けるか」
「なに冬の陣って、なんの話？　今夏なのに。わけわかんない」
「いいからおまえは黙ってろ。言ったとおりにして、口をはさむな」
エリカがぷうっとふくれた。
「ちょっと寒いんだけど」
「黙れって言ってんのに…あ」
ふと見ると、火がすっかり消えていた。花田の話に引き込まれていて、誰もがマキを足すことを忘れていたのだ。真夏の八月だというのに、忍びよる夜気は氷のように冷たい。少しでも体温を逃がすまいと、わたしはかたく身を縮めた。
「さっさと火をつけて」
偉そうなエリカの声。
「だめだ」
政治はにべもなく答えた。
「寒い。凍えて死んじゃう」
「我慢できない寒さじゃないよ」
「ヒロ。ヒロまで意地悪言うの。みんなよってたかって、あたしのいうことなすこと、かたっぱしから、だめだめだめだめ」
エリカがわたしをにらみつけた。なにかもおまえが悪いんだ、とでも言いたげに。

そんなエリカをヒロがなだめる。
「意地悪じゃないよ。火は貴重だから、無駄遣いできないの」
「ケチ。たった一本くらいいいじゃない。ムカゴ、もっとマッチないの」
わたしは無言で首を横に振った。
持ってるのは、家庭用マッチと書かれたマッチ箱ひとつだけ。なかみは、あと二十六本。
「だけど、なんでムカゴだけがマッチ持ってるの」
月明かりの下で、ふいにエリカが首をかしげた。
「そういえば、おかしな話だな」
「お滝まいりにマッチなんか必要ないのに」
あっ、エリカが突然叫び声をあげた。
「あのとき橋に火をつけた犯人、あれ、ムカゴだったんだ。あんた、いじめの腹いせに、みんなに仕返ししようとしたんでしょ」
政治と花田が、同時にわたしを見た。
「突然ごおって火柱が上がったじゃない。あんなこと、ふつうじゃ考えられない。誰かがガソリンまいて火を放ったとしか思えないじゃない」
全身がかっと熱くなる。一気に血が上る。わからない。どうしてわたしがマッチを持っていたかなんて。そんなこと考えもしなかった。
まさか、本当にわたしが橋に火をつけたの。
「それは違うよ」
ヒロの声。
「このマッチは、久保先生のポケットに入ってたんだ。あたしが見つけて、それをムカゴにあずけてたの。あたしってほら、見境なくすぐ川の中に飛び込んじゃうカッパでしょ。だから、ね、ムカゴ」
あいまいにうなずいた。だけどそんなの全部うそ。
「久保先生って、ほらヘビースモーカーじゃない」
「そうだったっけ？」

エリカが政治に問う。さあ、と政治は首をかしげた。
「だけどやっぱしムカゴじゃないんじゃない」
「どうして」
「下手すりゃ自分まで死んだぞ」
「あそうか」
とりあえずエリカはそれで納得したようだ。
わたしは納得できない。自分のことがまったく信用できない。もし心から自分という人間を信用していれば、記憶がなかろうがあろうが、わたしは火をつけたりしないってみんなの前で胸を張っていえるはずだ。
だけどそう言えるだけの自信がわたしにはなかった。逆に、そんなことをしそうな人間のように思えてならない。
ヒロはなぜわたしをかばったりしたのだろう。こんなひどい目にあわせた張本人かもしれないわたしの、いったいなにを信じ、それは違うって、言い切れたんだろう。
「じゃあ誰よ、犯人は」
エリカの不機嫌な声が夜の闇に沈む。
「もういや。もう一秒だってこんなとこにいたくない」
ぶるぶると震えながら、膝に顔をうずめた。ママ、パパ、誰か助けて。
ヒロは無言でエリカの背中にふわっとおおいかぶさった。自分の体温で少しでもエリカを温めようとして。エリカの嗚咽はじょじょに小さくなっていった。

1

第九話　消えたエリカ

第九部　消えたエリカ

その夜はよく眠れなかった。

うとうとして意識がふうっと遠のくと、そのとたんまぶたの裏に真っ赤な火柱が浮かび上がって、ぱっと目をあける。何度かそれを繰り返しているうちに、すっかり目がさえてしまったのだ。

近くの林で、ひとばんじゅうトラツグミが鳴いていた。姿を見せず、夜中にヒィーヒョウーと不気味な声で鳴くので、昔は、サルの頭とトラのからだを持つ妖怪ヌエだと怖れられていた。

人間って変な生きものだ。

醜い声を聞いただけで化け物だと決めつけたり、実際には見なくても、うわさ話だけで、憎悪と恐怖の感情だけを他人に伝染させることができるのだから。

ヌエという妖怪はその後、京都御所で源頼政の手によって退治され、川に流されたという。そしてヌエの死骸が流れついた土地では、ヌエの祟りを恐れ、村人が塚を作って手厚く弔った。

ミミズを捕食して生きている、たかだか三十センチほどのツグミを。

考えるとそらおそろしい。

人の心が生みだしたものより、おそろしいものはこの世にないのかもしれない。トラツグミの声に耳を傾けながら、そんなことを考えていた。

それでも明け方眠ってしまったようだ。目をさますと、とんでもないことになっていた。エリカがいなくなっていたのだ。

あたふたとヒロが状況を説明する。ぼんやりとした頭でようやく事態がのみこめたとき、周辺をさがしに出ていた花田と政治がちょうど戻ってきた。

藪をかけわけながら、どこにもいないと首を振った。
たぶん山をおりたんじゃないかと思う。そう言って、村まで続く下山道の途中に落ちていたという、エリカのピンクのぱっちんどめを政治が見せてくれた。
「どこまでばかなんだあいつは」
苦々しそうに政治が言った。
「迷子センターに駆け込んだのかな」
と言ってヒロがわたしを見た。目は笑っているけど、口調も表情もさびしすぎる。弱々しく笑い返すしかできなかった。
「どうしましょう」
「あたしはあとを追いかける。相手は運動能力ゼロのエリカの足だもの。追いかければ山をおりる前につかまえられるかもしれない」
「まじかよ」
「あんたは」
「俺はタイムポケットをさがす」
「エリカを捨てて？　そっちこそまじ？　自分だけ帰れたらそれでいいっていうの」
「あいつだって、自分で勝手に山をおりたんだ。俺たちを捨てたんじゃないか」
「助けを求めに行ったのよ。エリカなりに考えて」
「知るか。いい年して、人の話もまともに聞けない、危険予測もできない、あいつが悪いんだよ。とにかく、俺は何が何でも今日中に滝を探し、向こうの世界に戻る。向こうでは、俺の完全保障された輝かしい未来が、俺の帰りをまってるんだ。こんなとこでむざむざ死んでたまるか」
「未来があるのは、ここにいるみんなだって同じよ！」
「やめてください、ふたりとも。言い争っている場合じゃないでしょう」
花田に言われてヒロは口をつぐんだ。
政治はきょろきょろと何か探している。かしわの木に立ててあっ

たモリを手につかんだ。
「花田！」
政治は花田を呼んだ。「いっしょに行こう」
だけど花田は無言で動かなかった。政治はわたしの顔もちらっと見る。わたしは首を横に振る。
「勝手にしろ。ひとりでも俺は行く」
「そのモリは置いていきなさい」
「だめだ」
「あんたのじゃないでしょう」
「おまえのでもないだろ」
有無を言わせぬ鋭い目でにらみ返すと、政治は笹をかきわけて藪の中に入っていった。

1

第十話　すぐそこにある死

第十部　すぐそこにある死

残る三人でエリカを追った。無言で山道を駆ける。道といっても、背の高さほどもあるクマザサが四方八方からおおいかぶさって、やみくもに突っ切っているという感じ。ヒロを先頭に、わたし、花田が続く。

死ぬんだろうか、わたしたち。走っているあいだじゅう、そんなことばかり考えている。こんなに激しくどくどくと脈打っている心臓も、流れる汗も、ある瞬間を境にぴたっと止まる。

死ぬってどんな感じ。ぐっと息をつめた。ほんの数秒で、苦しくてパニックになりそうになった。

どこかままごとのようにしか感じられなかったできごとが、こんなとこで死んでたまるかって政治のたったひとことで、突然現実味を帯びた。。

ついこの前まで、殺し合いの戦国時代だった。度かさなる飢饉、命がけの一揆、生きのびることじたいが奇跡だった時代。太ももががくがくと震えていた。全身で感じる。

夢じゃないんだぞ。夢じゃないんだぞこれは。

ヒロもこわいだろうか。エリカなんかほっておけばよかったって、後悔していないだろうか。だけどクマザサと格闘しながら猛然と前に進む汗びっしょりのヒロを見ていたら、そんな気持ちはすぐに吹っ飛んだ。一瞬でもヒロを疑った自分が恥ずかしかった。

ふとチューインガムのことを思いだした。

久保先生のポケットの中になったチューインガムを、ふたりで分け合って食べた、初日の夜のできごと。

あのガムは最後の一枚だったのだとあらためて思った。だけどあのときわたしがヒロから受けとったのは、ただの食料ではなかった。

過去の記憶より、輝かしい未来より、もっと大切な、わたしが唯一必要としていたもの。渇望してやまなかったもの。
それが天から舞い降りてきたような気分だった。
これさえあればだいじょうぶだと思った。
それが何なのか言葉でいいあらわすことはできないけれど、あのとき確かに感じた、全身全霊をみたされたという真実、この記憶さえ心のどこかに持っていれば、それだけでわたしはだいじょうぶなのだと思った。
ほかにはなにもいらない。
「あと十分ほどです」
突然花田が声をあげた。
出発してからはじめてわたしたちは立ち止まった。三人の胴回りを合わせてもまだ足りないくらい太い杉の木の下だった。昨日一度山をおりている花田は、木の幹に「花」という印を彫りつけていた。
エリカとはまだ出会えていない。村までおりてしまったのだろうか。すでに誰かにつかまってひどい目にあわされているかもしれない。盗賊に捕まって遊郭に売られているかもしれない。先行するイメージに不安ばかりがふくらんでいく。
杉の大木を見上げたヒロの表情もとても険しかった。
ケモノ道のようだった山道が、いつしかまともな砂利道になり、やがて急な石の階段になった。みおろした先に青々とした田んぼが広がっている。
たがいに顔を見合わせた。力強く息を合わせて、「うん」とうなずきあったそのときだった。
「たすけて！」
突然、女性の悲鳴が聞こえた。
はっとして下を見ると、田んぼの水路わきにある、稲わらをつんだ小屋の前に人が立っていた。縛られている。
「エリカ！」
ヒロが叫んだ。

1

「行くんじゃない。わなだ」

後ろで誰かの声がした。えっと思って振り返った瞬間、布のようなものを顔におしつけられた。何が何だかわからないまま、意識がもうろうとしてそのまま気を失ってしまった。

第十一話　閉ざされた記憶

第十一部　閉ざされた記憶

「悠馬、そこにあるポール、とってくれ」
「これ？」
「そうそう、とったら天井のこっちのスリープに通す、お、そうだ、うまいうまい。すごいぞ。悠馬はキャンプ設営の天才だ」
「そんな才能いらないわよね、悠馬」
おとうさんとお兄ちゃんがテントを張っているすぐそばで、おかあさんは鼻歌まじりに、アウトドアキッチンテーブルをセッティングしている。買ったばかりのアルマイトのフライパンがぴかぴかに光っていた。
ふふっ。
「あら？　和子はなにしてるのそんなところに寝っころがって」
うふふっ。
「バッタさんとにらめっこしてるのよ」
「バッタさん？」
「うん」
「どこどこ」
と言ってお兄ちゃんがわたしの方に駆けよってきた。そおっとしゃがんで息をつめ草むらの中をのぞきこむ。おにいちゃんの左目の下に、大きな茶色っぽいほくろがある。すごく目立つし、これがなかったらもっとハンサムなのにと思うけど、おにいちゃんは、「ぼくのセマダラコガネくん」って呼んでけっこう気にいっている。
「ショウリョウバッタっていうんだよ、言ってごらん」
「ショウリョウバッタさん」
「さんはいらないよ」
お兄ちゃんは虫のことならなんでも知っている。六年生だけど、

先生からも虫博士って呼ばれている。でも虫だけじゃない、魚のことも、樹木のことも、なんだってくわしい。自然博物館の館長さんになるのがおにいちゃんの夢だ。
「お兄ちゃん、このバッタさん、おじいさんのヤギみたいな顔してるね」
おじいさんのヤギ？　お兄ちゃんがぷーっと噴き出した。ヤギだって。足をばたばたさせて笑ったから、バッタさんは透きとおった羽を広げ、キチキチキチと音をたててどこかへ飛んでいってしまった。
もうっ。また見つけてやるよ。ここらへんにはいくらでもいるから。カマキリだって、トンボだって。
そこは、海のみおろせる高台のキャンプ場だった。
「おーい、悠馬、戻って手伝ってくれよ」
テントをひとりでおさえていたおとうさんが、半べそ声でお兄ちゃんを呼んだ。
「ねえ、悠馬、どうこの感じ」
おとうさんのもとへ急ぐお兄ちゃんを、途中でおかあさんが呼び止めた。テーブルとイスの配置を気にしている。
「いいんじゃない。だけどぼく、そこにセットしてるスポーツマングリルの出番が心配なんだけど。それで魚を焼くんでしょ」
「そうよ。あとでおいしい魚をたくさんとってきてね」
「たくさんってどれくらい？」
「おなかいっぱいになるくらい」
「とうさん、かあさん、あんなこと言ってるけど」
「かあさんのおなかをいっぱいにするんじゃ、朝までかかるな」
ふふっ。
うふふふっ。
うふふふふっ。
芝生に寝ころんで、わたしは家族のそんな楽しそうな様子を眺めている。和子、何がおかしいの、みんなが交代ごうたいでわたしに

たずねる。
なんでもなーい。
みんな大好き、
おとうさん、おかあさん、おにいちゃん。
ふふっ。うふふふっ。うふふふふっ。
おかしな子。
ずっとこのままだったらいいのにな。
このままいつまでも日が暮れなかったらいいのにな。
ふふっ。うふふふっ。うふふふふっ。
うふふふふふふふ。

うふふって。
あれ？
わたし、声出てる。
楽しそうに笑ってる。
だけどなんで涙が？
夢？

1

第十二話　隠れ里の妖人

第十二部　隠れ里の妖人

菊を燃やすような匂いがあたりに漂っていた。蚊取り線香とも似ている。吸い込むと、頭の奥がずきずきと痛んだ。

状況がよく理解できない。なぜかわたしは、お寺のお堂のようなところでごろんと寝かされていた。出入り口のふすまはぴったり閉じられているけれど、その向こうは明るくて、なんとなく境内が広がっているような気がした。わたしのすぐ近くで、ヒロ、花田、エリカがそっくり同じ状態で横になっていた。

って、なんでエリカ？

はっと思いだした。なんでエリカなの？

田んぼの畦付近で、縛りあげられて、悲鳴をあげていたではないか。助けようとしたけど、助けたおぼえがない。変なものをかがされて、気を失ってしまったから。そう、確か倒れる直前に、わなだって声がして。

「起きて、とにかく、みんな起きて」

めちゃくちゃにからだを揺さぶると、次々に目をさました。

「うー、頭の芯がズキズキする」

「ここはどこですか」

「なにーこのにおい、服にくさいのがうつっちゃうー」

エリカの不満ったらしい声を耳にしたとたん、夢から覚醒したように、ヒロがばっとからだを起こした。

「エリカ、あんた、なんでここにいるのよ！」

聞くと、やはり助けを求めてエリカは、山をおりたのだった。誰にも何も告げずに去ったのは、みんなを見返してやりたかったから。

なんて浅はかな。なんて幼稚な。

そしてやっぱりというか、山をおりてすぐ、あの人相の悪い三人

組の男らに捕まったのだという。
「助けてって頼んだんだけど、ぜんぜん通用しなかった。刀をぎらっと見せられて、それで」
エリカはそこまで言って言葉を切った。よほどおそろしい目にあったのか、くちびるが真っ青だった。
「ごめんなさい。あたし、近くに仲間がいるのかと聞かれて、いると答えてしまったの。そうしたら、たぶん助けに来るだろうからって」
「それで、おとりになって、助けてーって叫んでたのか」
エリカはこくりとうなずいた。
「だけどね、叫んでるうちにだんだんと、これが自業自得ってことなんかなって気がついたよ。全部自分のまいた種っていうか。だったら助けなんか待つのはおかしいし、みんなを巻き込んじゃいけない。殺されるんだったら、自分ひとりで殺されないといけない。そこまで考えて、叫ぶのやめようって思った。ほんとだよ。そうしたらちょうどそのときに、階段の上にヒロたちの姿がちらっと見えたんだ。えー、うっそおとかって思って見てたら、突然見たこともない男の人が目の前に現れて、あっというまに、そいつらをやっつけちゃった」
「男の人？」
「うん。びっくりした。ひゅんって。どっかから瞬間移動してきたみたいな感じ飛び出してきて…」
そのとき、お堂のふすまがすっとあいた。はっと顔を上げた。まぶしい光に目がくらむ。逆行で顔が見えないけど、誰か三人、順番に中に入ってきて、すっとふすまがとじた。音もなく、ひとりでに閉まったように見えたので、びっくりした。
入ってきたのは、ふたりだけだった。袴姿の老人と男の人。二十歳くらいかな、老人につき従うように少しうしろで立っている。もうひとりはどこだろう。たしか三人入ってきたと思ったんだけど。
「気がつかれましたか」

しわがれた声で老人が言った。髪も髭も見事に白い。
「あっ、あのその、あの子が、い、い、いまあたしが話して、あの」
あわてればあわてるほど舌がもつれるらしく、エリカは、もどかしそうにえいっと老人の後ろを指さした。その指の先に視線を結んだ瞬間、頭の中がからっぽになった。
「おにいちゃん！」
「え」
みんなびっくりしてわたしを見たけど、一番驚いてたのは、叫んだ自分自身。その人の顔の中にある茶色っぽいほくろを目にしたとたん、反射的に叫んでいた。お兄ちゃんって。あの夢の中の人。わたしに、バッタの名前を教えてくれた。幸せのシンボルのような。
うふふっうふふっ。
思いだそうとすると、頭の芯がずきずきする。
「みなさんが驚かれるのも無理はありません。これからおいおい説明しますので、どうぞおからだを楽にお聞きください」
一見すると気むずかしそうな仙人のような風体だが、老人の声の調子には人を包み込むようなやさしさがあった。さっそく足を崩し、ヒロがあぐらを組んだ。
「わたしは、ここ神庭神社の御師をしております能海坊というものです。そして、ここにおるのは、弟子のハクでございます」
ここはやはり神社のお堂らしい。
でも、おしって？
「御師というのは、神に仕え、全国から集まる山伏や信者に宿泊や便宜を図り仕事をするものでございます。ここ神庭は祈りの山にて」
え、このおじいさん、いまわたしの心を読んだ？　まさか。偶然偶然。
「エリカを助けに行こうとしたあたしたちに、変なにおいをかがせてここに連れてきたのも、もしかすると」
老人がうなずく。
「さぞかし驚かれたことでしょう」

「どうして、そんなことを」
「どうしてって、オレっちが行くのが、あと一歩遅かったら、あんたら全員あの浅野の犬どもに首を落とされてたんだぞ」
どこからか小さな子どもの声がした。
「九兵衛、口を慎みなさい」
能海坊老人が一喝すると、突如、能海坊老人の後ろに立っているハクのとなりに、もうひとつの影が、ぼおっと浮かび上がってきた。
まるでリモコンでテレビをつけたときみたいに、映像は次第にくっきりはっきりとなって、小さな男の子の輪郭をそこに描きだした。
そ、そんなばかな。ごしごし目をこすってもう一度よく見たけど、間違いない。その子はずっとそこにいたかのようなすました顔で、能海坊老人の背後に立っていた。
学年でいうと、小学校一年生くらいだろうか。真っ黒に日に焼けて、どこの少年野球チームにもひとりはいそうな、いかにもやんちゃって顔をしていた。
ただその顔には、左の額から右の顎にかけて刀でざっくりと切られたような大きな傷跡がついていて、直視できないほど痛いたしい。
「ね、ねえヒロ、あ、あの子、どこからあらわれたか見た？」
ヒロにぴたりとからだを押しつけて、エリカが不気味そうに小声でささやいた。ヒロがぶるぶるっと首を振る。同じようなひそひそ声で、「ぜんぜんわかんなかった」
「ちょっとそこの兄ちゃん、姉ちゃん、ちゃんと聞こえてるぞ」
ふたりがびくっと飛び上がった。
「それに、オレっちはずっとここにいたぞ。気配を消してただけさ。まったく、こんな幼稚な術も見破れないとは、四百年後の連中は、たいしたことないみたいだね、能海坊様」
「やめんか九兵衛！」
能海坊老人は、手にしていた杖で九兵衛の頭をこつんと叩いた。いててて、九兵衛がしゃがみこんで頭を抱える。
「すみません。こやつは、九兵衛といいまして、ハクと同じように、

宿坊の手伝いをさせておるのですが、なんというか、不憫な境遇ゆえ、何かと甘やかしてしまいまして」
能海坊老人は、このバカたれと言って、九兵衛の頭をまたこつんと叩いた。
「でも、助けてくれたんだよね」
エリカがひょいとからだを傾けて、能海坊様のうしろでひいひい頭を抱えている九兵衛に声をかけた。
「その天才的なすごい術と、天才的なすごい耳で、あの悪党どもからお姉ちゃんたちを救ってくれたんだよね」
九兵衛が照れたようにえへっと笑った。
「あの九兵衛君とやら、いま四百年後の連中って言いませんでしたか」
半信半疑って感じで、花田がわたしの腕をつんつんと突いてきた。
「うん。言った」
なんで知ってんのって、わたしもひっかかっていた。
言ったよね、と今度はヒロの腕をつんつんと突いた。
「言った」
とヒロが答えた。妙に声が険しい。
「あのガキ、あたしのこと兄ちゃんって言った」
「え…」
こほん、能海坊老人がひとつせきばらいをした。わたしたちはしゃべるのをやめ、能海坊老人の話に耳を傾けた。心なし笑いをこらえているように見えるのは、気のせいだろうか。
「さっき、九兵衛が口をすべらした件ですが、いずれは説明せねばならぬことゆえ、いま説明いたしましょう。どうぞこちらへ」
能海坊老人がくるっと背中を向けると、入ってきたときと同じように、音もなくひとりでにふすまがあいた。

1

第十三話　反魂の術

第十三部　反魂（はんごん）の術

その部屋は、長い廊下のつきあたりにあった。いちばん前を歩いていたハクが、木戸をあけた。中からむせるような菊の香りが流れでてきた。さっきお堂の中でかいだ頭の芯がしびれるような匂いはここから出ていたのだ。

窓のない板張りの六畳ほどの部屋だった。部屋の四隅に香呂が置かれてあって、そこから紫色の煙がもうもうとあがっている。

その部屋の真ん中に人が寝かされていた。光沢のある紫の布ですっぽりとおおわれているので、誰だかわからない。中は薄暗く、九兵衛が手にしているろうそくの明かりを頼りに顔を近づけた。

「久保先生だ」

ヒロが耳もとでささやいた。

「うそ」

「ほら」

布のはしから、靴がのぞいていた。ピンクのラインの入ったばかでかいプーマ。

「誕生日に彼女からもらったんだ、いいだろうって騒いでたから、趣味わるすぎとか言って、みんなで踏んづけまくったんだ。だからよくおぼえてる」

って、だけど、なんで。

「それをこれから説明します、よくごらん下され」

ぎくりとして能海坊老人に目をやると、そしらぬ顔で、久保先生らしき人物にかけられていた布に手をかけた。

やっぱり心を読まれてる。

「くっ、久保先生！」

エリカが悲鳴に近い声で叫んだ。やっぱり。久保先生のもとにが

ばっと身をよせ、エリカは、先生、先生、先生、と狂ったように呼び、からだを揺さぶっている。「起きて、起きて」。
起きるわけがない。
死んでいるのだ。
そうかエリカはあれを見ていないから…。ふいに藪の中にころがっていた久保先生の無残な姿を思いだして、あらためて背筋が凍りついた。
だけどなぜ、なぜ、手裏剣の刃にかかって死んだはずの久保先生が、ここにいるのか。
答えを求めるべく、能海坊老人にすがるような視線を向けた。能海坊老人は深いためいきをもらした。今気づいたが、能海坊老人の瞳は深い緑色をしていた。見ているだけで吸い込まれそうな、滝つぼの緑…。
「この人は、わたしたちの先生です。遠足の途中、一緒に橋から転落したのですが、見つけた時には、すでに誰かに殺されて死んでいました。その久保先生がどうしてここにいるのですか」
はっとなってヒロを見た。ヒロは必死に能海坊老人に訴えていた。
「山の夜は長い」
能海坊老人はゆっくりと腰をおろし、木戸の前であぐらをかいた。そのあととてつもなく長い息を吐いた。その緩慢な動作に、急いていた気持ちが少しやわらぐ。
その場にすわり、久保先生を囲む形で輪になってすわった。誰が言い出したわけでもないけど、目をつむり、気をそろえて長い息を吐いた。
まぶたの裏でろうそくのオレンジの炎がちろちろと燃えていた。しばらくして目をあけたときには、ショックで暴風雨なみに荒れていた気持ちがおさまり、おだやかに凪いでいた。
また何かの術にはまったのだろうか。そんなことを考えていると、能海坊老人がぽつぽつと話しを始めた。
「四日前のことです。わたしはここにおるハクを、紀州高野山にあ

る九度山までつかいにやりました。そこに住む真田という男に伝えたい大切な用があったからです。
翌日、ハクは九度山から戻ってきました。
しかし、そのことがどこかで徳川方に漏れたのか、柳生の忍びが、剣谷あたりでハクを待ち伏せしておったのです。関が原の戦ののち、徳川は九度山に押し込めた真田が、いつ反旗をひるがえすかと、常に警戒し、目を光らせております。
領内要所の関所の検問はもちろんのこと、最近では、こんな山奥にまで忍びを入れて、大阪方へ加担するやもしれぬ木こり、農民、地侍、修行僧までも、片っ端から首をかっきっていくありさま。
しかしその際の、柳生の狙いは、ハクが真田から受け取ったわたしあての手紙ただひとつ。しかし、そういう訓練は日ごろから積んでおります。なので結果的には、無事逃げおおせ手紙を無事持ち帰ることができたのですが」
「たまたま剣谷付近の藪の中をうろついていた久保先生が、巻き添えをくって、殺されてしまった、ということですね」
能海坊老人のあとを、ヒロがつないだ。
「そのとおりです」
なんて残酷な運命のいたずら。忍者っぽい久保先生の黒の上下のジャージが命とりになったのか。違う。そうじゃない。死んでいたのは、わたしでもおかしくなかった。
同じころ、同じ場所を、わたしもうろついていたではないか。何も知らずに久保先生に首に刺さった苦無を抜きとり、泳いだり魚を捕ったりして、ある意味のんきに遊んでいた。
生きるか死ぬかは、投げ上げた十円玉のコインの裏表にすぎなかったのだ。
ぶるぶるっと背中が震えた。
「それじゃあ、ぼくらのことは誰から」
「この方です」
「この方って、死んでるじゃないですか」

そう。わたしたちが見たときにも、すでに久保先生は死んでいた。
ハエがたかっていた。間違いない。この目で見た。百歩譲って、あのとき瀕死の状態だったとしても、自分のことを他人にぺらぺらしゃべって聞かせるような状態ではなかった。
それなのに、目の前にいる久保先生は、今にもむっくりと起き上がって、おまえら宿題ちゃんとやってきたかー、なんて言い出しそうなくらい、顔の色つやもよく、弾力もある。今は真夏なのだ。想像したくはないが、もし三日も前に死んでたなら、もっとどろどろに腐ってるだろう。
交霊でもしたっていうの。
まさかそんな。
頭の中はぐらぐらで、ふきこぼれ寸前のやかんみたいだった。ふと見ると、そんなわたしを、意味ありげな笑みを浮かべて能海坊老人が見つめていた。

神庭山。兵庫県内の小中学校のハイキングや自然学校で利用されているその山は、古く、平安時代においては、滝をご神体とする山伏たちの修業の山であり、たくさんの信者、山伏らが、ここを訪れ、山伏兵法と呼ばれる武術、秘印、呪術などを学んだのだという。
花田がしっかりおぼえていた。お滝まいりの前に、先生が印刷して配ってくれた「お滝まいり資料集」の中に書いてあったらしい。そんなのまともに読んでるやつは誰もいないとヒロが言った。
外はもう真っ暗だった。また少し月が太った。境内はうっそうとした杉に囲まれている。満天の星と、月明かりのおかげで、ころばない程度には歩けるが、それでも暗い。
森の中に少し入ったところ。ハクが手際よく穴を掘る。さくさくという音と、エリカのすすり泣く声が、深い森の闇の奥に吸い込まれていく。久保先生の頭の方をハクが、足の方をヒロが抱えて、そおっと穴の中に寝かせた。
そのあともくもくと土をかぶせる。

ヒロ、花田、エリカ。ヒロ、花田、エリカ。ひとすくいずつ。
久保先生の魂は、ハンゴンの術という方法でこの世に呼びもどされた。能海坊老人が教えてくれた。ハンゴンソウというキク科の多年草の植物とインドで使われる乳香の材料とあわせて焚くと、死んだ人の魂を呼び戻すことができるのだそうだ。
呪術のひとつで、漢字で書くと反魂の術。
久保先生の魂は、まだあの場所にしっかりとどまっていて、すぐに呼びもどすことできたらしい。そして、能海坊老人は先生の口から直接、話を聞くことができた。
「生徒たちを、こんな目にあわせてしまったのは、全部自分の責任だと、そればかりを悔やんでおいでした」
「もっとほかに何か言ってませんでしたか」
「ほかに、とは？」
なにもかも見透かすような能海坊老人の緑の瞳の前で、わたしは、何かもさらけだしてひれ伏したいような強い衝動にかられた。
「たとえば、その、転落したときの、事故の状況についてとかです。誰かを恨んでたとか」
能海坊老人の首が静かに横に振れた。
「誰も恨んでなどおられませんでしたよ。自分の運命もきちんと、受け入れておいでした。ただ、自分のせいで大切な生徒がこうなったのが許せない、生徒だけは無事に帰してやりたい、そればかりを」
「大切な生徒」
「はい。生徒を助けてやってほしいと。それが最後のことばでした」
その後、能海坊老人は、魂送りのみことのりというのを唱えると、久保先生は静かにのあの世に旅だっていったという。
きっといい先生だったのだ。
さようなら。おぼえてないけど。
「先生、わたしたち、必ずもとの世界に戻るからね」
かみしめるようにつぶやいて、ヒロが土をかぶせる。

きっと。きっと。
橋に火をつけたのはわたしじゃないのかもしれない。
でもわたしだったら。
わたしの横で、ハクが手を合わせていた。かすかにくちびるが動いている。なにかありがたいことばを唱えてくれているのだろうか。
お兄ちゃんと同じ、セマダラコガネのほくろ。
これ以上何も思い出したくない。
なぜ。あんなに楽しそうだったのに。
近くで滝の音がしていた。
垂直に降ってくるようなすさまじい音。この神社のすぐ上に、おそらくご神体の滝というのがあるのだろう。
久保先生はここで、神さまのすぐそばで永遠に眠るのだなと思ったら、なぜだかふっと気が遠くなった。

1

第十四話　もどりたくない

第十四部　もどりたくない

「少しは何か思いだした？」
お湯の中にもぐっていたエリカが、ぶくぶくと顔を出してたずねた。心配そうな顔。わたしに対するエリカの態度はずいぶん変わった。
「家族のことを少し。さっきお堂で倒れていたとき、夢の中で」
「そうよかったじゃない」
エリカの表情がぱっと明るくなった。だけどわたしの反応を見て、
「でもなさそうだね」とふたたび沈んだ。
「元気だして。向こうの世界に戻ったら、きっと何もかも思いだすよ」
能海坊老人にすすめられて入った風呂は、ここ数日の汗と汚れだけでなく、わたしたちの得体のしれない不安や絶望を洗い流し、ヒノキのいい香りは、
明日と向き合う希望のようなものを芽生えさせてくれた。
「あのハンゴンの術とかってやつでムカゴの記憶も戻らないかな。魂だって呼び戻せるんだから、きっとできるよ。明日、ここを出る前に、能海坊老人に頼んでみない？」
エリカの声をかき消すように、わざと大きな音をたてて、お湯から上がった。まるで聞こえてなかったかのように、洗い場の桶で浴槽のお湯をすくった。
「まさかムカゴ、記憶が戻るのがいやなの？」
半信半疑って顔で、ヒロがのぞきこんだ。ぎくっとして、目をそむけた。
「そんなのいや」
突然エリカが叫んだ。いまにも泣き出しそうな顔をしていた。

「もういじめないから。約束する。帰ったら、ちゃんと言う。小枝にも美佐にも愛ちゃんにも。二度とムカゴをいじめさせないから。みんなの前で、今までのこと、ムカゴにちゃんとあやまるから。だから」

エリカはそこでいったん言葉を切った。手ぬぐいで背中をこすっていたヒロの手が止まった。

「あっちでも、友だちでいれくれる？」

握っていたはずの石鹸が、ぽろっと手の中からころがり落ちた。ヒロがそれを拾って、わたしの手の中に押し込める。なんとかいってやりなよ、目がそう訴えている。

「わたし」

と答えたものの、そのあとの言葉が続かなかった。のどがぐっと詰まって、何も言えなくなってしまった。言葉を吐き出そうとしたのと同時に、もとの世界に対する強い拒絶反応を感じた。

「だめ、か。だめだよね。決まってるよね。いまさら、勝手すぎるよね」

えへっと笑って、エリカは、お湯でばしゃばしゃと顔を洗った。

ヒロは黙って、背中をこすりはじめた。これでもかこれでもかというくらい強く。背中に競泳用の水着の型が鮮やかに残っている。ヒロはあっちの世界になくてはならない人だ。エリカも、花田も。

誰からも期待され、愛され。だけどもわたしは。

「ごめんなさい」

もとの世界の自分に自信が持てない。信じられるのは今、この自分だけ。

「もういいよ。ムカゴ。何も言わないで。あたしに気なんかつかわなくていいから。それだけのことはしてきたんだからさ」

違う。そういうのが問題なんじゃない。

「政治、無事帰れたかなあ」

エリカが天井を見上げてつぶやいた。三角屋根の天井には、明かりとりの窓がひとつついていて、そこから夜空にまたたく無数の星

が見える。
「さあね」
ヒロは不機嫌な声で言うと、桶でお湯を乱暴にすくって、ざばっと頭からかけた。
「あたし、政治のこと別になんとも思ってないよ。っていうか、あいつだけでも助かってくれたらいいなあって思ってる」
「なにそれ。エリカらしくもない」
「そうかな」
「そうだよ。いつものエリカだったら、なにょ政治のやつ、なんでこのあたしをおいて逃げるのよ、きいっ、許せない、出てこい、ってなんのにさ」
そっか。エリカは湯船から上がると、足だけお湯につけて、浴槽のふちに腰をかけた。
「ヒロもムカゴも、政治と一緒に行けばよかったのに。そうしたら、いまごろ、日曜洋画劇場なんか見れてたのに。あたしなんかほっといてくれても、よかったんだよ」
つまさきでぴんぴんとお湯を跳ね上げた。
「なに悲観的になってんの。まるで一生このままみたいに。あたしたちも、帰るんだよ」
うん、といったきり静かになった。
ふと見ると、エリカの大きな瞳からぽろぽろと涙がこぼれていた。
「泣くな」
「だって、えっ、えっ」
しゃくりあげてしばらく言葉にならなかった。
「ほ、本当は、迎えにきてくれたとき、すごくうれしかった。でも、自業自得だもんね、こんなあたし、来てくれなくて当たり前って思ってたから、だからもう、感激して、足も手も腰もがくがく震えて、だけど、だけどもしそのせいで帰れなくなったらと思うと、あたし」
「帰れるって言ってんだろ」
ヒロにどなりつけられて、エリカの声がぴたっとやんだ。泣いて

くしゃくしゃになった顔を両手でふせた。
わたしは自分の手ぬぐいをかたく絞り、平たくしてエリカの頭にのせた。
「ムカゴごめん」
エリカの伏せた手のあいだから、くぐもった声が聞こえてきた。
「あたし今までずっと、自分が主役で、あとはみんな脇役だと思って、そんな風に感じて生きてた。あたし以外の人間にも、自分と同じ重みの命があるなんて考えもしなかった。それなのに、あたし」
「もういいって。帰ったら、その気持ちで老人介護施設でボランティアでもしたらいいんだって。だから気を強く持って」
うん、うん。
ヒロの言葉に、エリカは、繰り返し何度もうなずいていた。

1

第十五話　つかのまの安らぎ

第十五部　つかのまの安らぎ

お風呂のあとお堂に呼ばれた。行くと、がらんとしたお堂の中に、四人分の食事が用意されていた。白米に麦かひえかわからないような茶色の穀類が混ざったごはん、サトイモの炊いたの、山菜のゆでたの、煮干。わたしたちのほかには誰もなかった。

文句を言うものはひとりもなかった。魚と野生の木の実しか食べていなかった身にはありがたく、わたしたちは、感激に身を震わせ、茶碗をかじる勢いでがつがつ食べた。

そのあと九兵衛が、修行者が寝泊まりに使うというかやぶきの小屋にわたしたちを案内した。見るやいなや、高床式倉庫みたいだと花田が言った。

「なに？　まだ何か用？」

木戸をあけたまま、なかなか帰ろうとしない九兵衛にヒロがたずねた。

「兄ちゃんに用はない」

九兵衛が不機嫌に答えた。

「兄ちゃんじゃない、姉ちゃん！」

ふんっと、顔をそむけた。

「このっ、にくたらしい」

「兄ちゃんじゃなかったら、この姉ちゃんに用かな」

エリカがヒロの肩越しに、ひょいっと顔をのぞかせた。九兵衛の顔がかっと赤くなった。

「入ってく？」

部屋の中にはすでにふとんが敷いてあった。狭くて、四人分敷くといっぱいいっぱいだったけど、天窓のついた天井は高くて、清潔だった。

「あたしのどこが兄ちゃんなんだっつうのよ」
「全部だ。そんな刈り上げの女、この世にいねえぞ」
「向こうにはいるんだよ。これがモテる条件なの」
「うそつけ、筋肉もりもりの女がモテるわけねえ」
「黙れ」
激しく言い合いながらも、足ずもうなどしながら、けっこう楽しんでいる。
「九兵衛ちゃんはいくつ？」
「ななつ」
肩ではあはあ息をしながら、エリカの質問に九兵衛が答えた。
「七歳で、あんなすごい術を使えるの？」
「あんなって、ああ、隠形の術か。あんなの簡単さ」
「ほかにどんな術が使えるの」
「あっ！」
エリカの質問のあと、突然九兵衛が天井を指さした。全員いっせいに、上を向いた。なんなの？　と言って視線を戻すと、九兵衛がいなくなっていた。
「あれ、九ちゃん。九ちゃん」
きょろきょろとあたりをさがす。どこにもいない。
「ここだよ」
天井から声がふってきた。見上げると、天井の梁にクモのようにへばりついていた。すとんと飛びおりて、どんなもんだい。
「すごいすごい。忍者みたい」
エリカが拍手した。
ヒロがおもむろに立ち上がった。
「九兵衛、いまのどうやんの」
アスリート魂というか、スポーツ選手は、ふつうの人とは、火のつく次元が違うのだろうか。今のを見てやってみようなんて、爪の垢ほども思わなかった。あ然としていると、その場にかがみ、天井をにらみつけて飛び上がった。

「ぜんぜんだめだね」
と九兵衛。
「くっそお」
ジャンプ、ジャンプ。
「もっかいやって」
「やだね」
「やれ」
逃げまわる九兵衛を追いまわし、つかまえると、首をしめてやりかたを吐かせようとした。
「もうやめなよ」
なにがなんでもマスターしたいというヒロに、エリカもわたしもすっかりあきれてしまった。
そのあいだ花田はひとり、壁にもたれ、むずかしい顔で何か考え事をしていた。二日に事故にあって明日で四日目。遅れた受験勉強を取り戻す算段でもたてているのだろうか。

冷たい。
「かあちゃん」
かぼそい声。
「ひゃあああ」
自分の叫び声で、はっと飛び起きた。
おねしょをしたと思った。
横に九兵衛がころんところがっていた。エリカの胸にしっかりと抱かれて、すやすやと眠っていた。
犯人は九兵衛ちゃんか。そのかわいい寝顔には、あまりにも不釣合いな大きな刀傷。たった七歳のこの子の身にいったい何が起きたのか。
「なんの騒ぎ」
わたしの悲鳴に驚いて、エリカが目をさました。
「かあちゃ～ん？」

九兵衛が寝ぼけた声をだした。見ると、九兵衛の頬には、涙のあとがくっきりと残っていた。エリカと顔を見合わせた。
「エリカ、もしかして、九兵衛のかあちゃんに似てるんじゃ」
わたしが言うと、エリカは複雑な表情をした。
そして、もういちどふとんにもぐりこみ、両腕でそっと九兵衛を包みこんだ。エリカの胸のあたりを、九兵衛の手がもぞもぞとはいまわっている。少し笑って、やがてまたすうすうと寝息をたてだした。
「九ちゃん。いい子ね」
エリカが空気のもれるような優しい声を出した。そしてもう一度眠った。

1

第十六話　忍びの術

第十六部　忍びの術

借りていた渦巻き柄の寝巻きを脱ぎ、体操服に着替えて外に出ると、ひんやりとした山の空気がとても気持ちよかった。

うっすらと色づきはじめた空の下に、杉木立に包まれたりっぱな社殿がどんと建っていた。白砂の境内、鮮やかな朱色の神門。けっして大きくはないが、風格がある。

社殿の背後に鳥居があって、その向こうにはそびえるような急勾配の石段が続いていた。たぶんその上に滝があるのだろう。水音がごおごおと地鳴りのように響いていた。

どこからかラジオ体操第一でも聞こえてきそうな朝のすがすがしさ。

九兵衛が手伝って、エリカが小屋の前でふとんを干している。花田は能海坊老人に話があるといったきり、帰ってこない。

わたしはずっとヒロをさがしている。どこに行ったのか、ちょっと出かけてくる、と地面にでかでかと書き置きを残したまま、朝から姿を消してしまっていた。

「ムカゴ、ちょっとあれ」

ふとんを叩いていたエリカが、突如、杉の木を指さした。見上げると、何十メートルもある杉の木のてっぺん近くの枝に人が立っていた。枝でも払っているのかと思ってしばらく見ていると、突然、飛び込み台からプールに飛び込むように、頭から地面に突っ込んできた。

声も出せずに、とっさに目をつぶった。

トントントントントントンという乾いた音を六回聞いた。人の落ちる悲惨などさっという音は耳に入らない。

「だいじょうぶだよ、稽古だから」

九兵衛が言った。
「稽古？」
「そっ」
おそるおそる手をおろした。白袴のハクが、木の幹に刺さった苦無を抜きとっていた。
「どういうこと？」
「教えてあげるから、おねしょしたこと、ハクには黙ってといてね」
わかったというと、にっこりして教えてくれた。
「あの訓練はね、地面に着地するまでに、二回転して、そのあいだに、苦無を六本、あの古木に命中させるの」
「二回転しながら、投げるの」
「うん」
信じられない思いで、あらためて杉の木を見上げた。ごまつぶみたいに小さく見えた。あんなところから飛び降りたなんて。
トントントントントントン。
あれは苦無が六本刺さった音だったのか。
「あんなの簡単さ。三本までならオレっちもできるよ」
いい終わらないうちに、駆け出していた。杉木立をぬって、一本の枝にとびつくと、まるで鉄棒の選手のように、枝から枝へ、ひゅんひゅんとまわりながら、あっというまにてっぺんまで登ってしまった。
「ねえちゃん」
「危ない、やめて」
エリカが気づき、叫んで止めようとした。
「だいじょうぶだから、見てろって」
「きゃあああ」
エリカの悲鳴が尾を引いているあいだに、九兵衛は着地した。公言したとおり、地面に足をつくまでに、二回転して、苦無を三本、古木に投げて命中させた。
トントントン。

「ほらね」
自分の刺した苦無を抜きながら、九兵衛はにっこり笑った。
「そのうち、ハクと同じ六本命中させるようなるんだ。オレっち今、能海坊様に、火遁の術も教えてもらってんだ。それが完全にできるようになったら、柳生の忍びなんかもう屁でもないからな。すぐに江戸に行って家康のおっさんの首をこの手で……、どうしたんだねえちゃん」
と振り返った九兵衛を、突然エリカが抱きしめた。
「だめよ」
「なにが」
九兵衛が息苦しそうな声でたずね返す。窮屈そうな表情を見せながらも、まんざらいやでもないようで、九兵衛はエリカの腕の中でじっとしていた。
「命を粗末にしちゃだめ」
「自分の命なんかどうだっていいや。オレっちは、かあちゃん、とうちゃん、にいちゃんの敵をとる。それだけだい」
九兵衛の頬についた大きな刀傷を、エリカは指でなぞると、九兵衛はくすぐったそうな声をあげた。

1

第十七話　帰還に向けて

第十七部　帰還に向けて

「あなたがたが二日前におられた場所は、たぶんこのあたり、羅漢山西はずれの材木収集場でしょう。この道をこうおりてきて村におり、ここ、この鴨狩辻でエリカどのが襲われたのです」

お堂に広げた地図を囲み、自分たちの位置をたしかめていた。地図といっても、簡略化された墨絵の山のところどころに、おおざっぱに地名が書き込まれているだけの。

「そしてこれが本宮川。お滝まいりというのは、この川に沿って行われていたのですな」

「そうです」

ずっと眉をしかめていた花田だったが、はじめて自信を持ってうなずいた。

「風車の滝というのは、どのあたりですか」

「風車の滝？」

「はい、サンショウウオセンターを出て、風車の滝を見て、すぐ先のつり橋をわたっている途中で事故にあいました。竜眼の滝をめざしていたのです」

サンショウウオセンター、風車、竜眼、今度は能海坊老人が眉をしかめる番だった。

「ひとつひとつの滝にそういった名前はついてませんのお。あるとすれば、この上にある、神庭のご神体、神庭滝くらいですか」

「そうですか。あれは、最近つけられたものだったんですね」

「あの、ふたごの滝はどのへんでしょうか」

「ふたごの滝？」

わたしの質問に、能海坊老人は、おかしな顔をした。

「あ、名前とかじゃなくって、ふたごみたいな滝。そんな大きくな

い。わたしのふたり分くらい。まったく同じ形で二個並んでいるんです。その滝のよっつ上に、わたしひとりで倒れてたんです」
はて。能海坊老人は腕を組んで少し考えたあと、はたと手を打った。ありましたなそういうのが。顔を地図に近づける。
「たしかこのあたり……、ちょうど剣谷のすぐそばですな。久保先生の倒れておった。ここから、よっつ上だとすると、いまおっしゃった場所は、だいたいこのあたりでしょうか。位置関係でいうと、ほれ、ここが、われわれが今おる神庭神社」
能海坊老人がさし示した神庭神社の場所は、このあたりといった、さらに上にあって、平地の鴨狩辻からこんな高い山奥まで、どうやってわたしたち三人を運んできたのかと、さらなる疑問を持った。
「ぼくが倒れていたのも、ムカゴと同じそのあたりの河原だと思います」
「じゃあそこに行けば」
「もとの世界にも戻れる」
「イェイ」
「しかし問題がひとつ」
ハイタッチをかわしたわたしと花田に、能海坊老人は水をさした。
「ごらんください」
能海坊老人はそう言うと、枯れ木のような細い指で地図上の山の稜線をなぞった。わたしたちが事故にあったとおぼしき場所を越え、指はそのまま斜面をすべりおりる。その先には城があった。
「ここは浅野の城下町に入る山ごえ道の途中にあたります。しかも少し登れば、大阪湾を一望できるホウガン岩もあり、いちばん監視の厳しい所。かつては修験者の行き場として栄えたのですが、いまでは、首ねらいの山賊、おいはぎ、徳川の放った伊賀甲賀の連中が、うじゃうじゃしておって、素人がむやみやたらにうろつける場所ではありません。ですから、行きかたを、よく、考えねば」
刻一刻と戦の日が近づいていた。目に見えぬ不穏な空気が、山全体をおおっているのだろう。息づまるような緊迫感をおぼえた。

「ハクさんは、この峠ごえを越えて、紀州の九度山まで行ったのですね」
花田がたずねると、能海坊老人はうなずいた。
「九度山といえば、関が原ののち、真田昌幸、幸村父子が上田城を追われ、隠居させられていた土地。新たな東西対決を目前にして、いまごろ幸村は九度山を出る準備におわれていることでしょう。戦にはなにより、金、家臣が必要ですから。
それを考えると、あのハクさんという人は、よほど重要な役割を持つ人物らしい」
どこかかけひきをしているようにも感じられる花田の態度に、能海坊老人はいやな顔ひとつせず耳を傾けていた。それどころか、好奇心たっぷりの余裕の笑みさえ浮かべて、
「そのようなことが、四百年後の歴史書に書かれておりますか」
それで、花田もつい、「はいこういうものに」と言って、ポケットの中の歴史用語集を取り出して見せた。
「ほほう、そのような小さな書物に」
「はい。人間が猿だった時代から、少子高齢化という社会問題に直面している今日にいたるまで」
ショウシコウレイカ。変な言い回しでつぶやいたあと、「九度山のこともですか」、と能海坊老人はたずねた。
「はい。関が原の戦いののち、本来であれば真田家は取り潰し、城主である真田昌幸も極刑に処せられるはずでした。しかし、長男の真田信幸が徳川近臣本多忠勝の娘婿であったため、助命に応じ、高野山送りとなり、のち九度山に居を構えたと、ちょうどこの巻末の、歴史豆知識コーナーというところに」
「そのくらいでじゅうぶんです」
ページをくろうとするのを、能海坊老人が止めた。ふぉふぉふぉっとおかしそうに笑いながら。
「この先どうなるか、お知りになりたくないのですか」
「知ってはならぬことゆえ」

「でも」
きっと花田は、この老人を助けたいのだ。
歴史的な関連はなにひとつわからないけれど、間違いなくいえることは、この神社は豊臣に味方しているということ。
ふいに、政治のぶっきらぼうな声がよみがえる。花田に呼んでみてくださいと言われて読んだあの文章。
「☆関が原以降の豊臣氏。豊臣秀吉の子、秀頼は、関が原の戦いのあとも、大阪城を本拠とし、西国の諸大名に影響力を持っていた。１６１４年大阪冬の陣。家康は徳川氏への対抗をやめない大阪城を攻めた。いったんは講和がなったが、翌年大阪夏の陣で、ふたたび大阪城を攻撃し、豊臣氏を滅ぼした。以降太平の世に」
ということは、ここにいる、能海坊老人たちも、この山のどこかにある隠れ里の人たちも、みんな死ぬってこと。
「その先を、けっして言ってはなりませんぞ」
「でも」
「でもじゃありません」
能海坊老人はいたずらっぽい顔で、くちびるをしっと指で押さえた。
「なんの因果でこうなったのか、よくわかりませんが、そこは神さまのなさること、きっと何か意味があるはず。この世には、偶然なんてことはなにひとつないのですから。ここでなにを見る自由、なにを感じるのも自由。しかしこの時代の川に石を放り込むようなことはしてはなりません」
「石を…」
花田がつぶやく。
「川に投げ入れられた石は、どんな小さなものでも必ず波紋を生みますからな」
この世に偶然なんてことはなにひとつない。本当だろうか。能海坊老人のその言葉は、自分でも驚くほど深いところまで胸にしみこんできた。

「失礼します」
後ろでヒロの声がした。
びっくりして振り返ると、白襦袢、白頭巾、白鉢巻き、白足袋、足の先から頭の先まで白ずくめの男三人を引き連れ、ヒロがリュックをぶらさげて立っていた。ヒロもまたそっくる同じ白装束姿である。
「ヒロ、どこに行ってたの、それにそのかっこう」
「ヒロさん、そのリュックどこで見つけたんですか」
わたしの声と花田の声がきれいにかぶさった。
「いまから説明する。とにかくエリカを呼んできてよ。携帯見つかったって」

神庭山の荒行のひとつに、「闇駆け」というものがあるそうだ。修験者は白装束に身を包み、途中岩登りもあるという山また山の道を、山上のイワコトサキ岩まで、朝一番に駆け抜けていく。
「昨夜よく眠れなくて、明け方外に出たの。そうしたら、この人たちがちょうど闇駆けの修業を始めようかというところで、おもしろそうだから、仲間に入れてもらった」
どういうことかと説明を求めたら、汗びっしょりの顔でしゃらっと答えた。こっちはずっと心配してたというのに。
「で、このリュックなんだけど」
ヒロは地図上のイワコトサキ岩の下あたりを指さし、たしかこのへんだった、と言った。いっしょに帰ってきた修行者も、間違いないと。だけど、その場所は、さっきわたしと花田が特定し、ハイタッチをかわした地点から遠く離れている。花田は首をかしげた。
「ぼくらはこのへんだと思っていたのですが」
ヒロが少し考えて、
「でも、こっちとあっちの世界をつなぐトンネルは、同じ地点を結んでいるとは限らないんじゃない。もっと複雑なのかもしんない。とにかく、わたしたちが事故当時に身につけていたリュックが、ま

とめてよっつここで見つかった、それはまぎれもない事実なんだし、このポイントに、なにかあるのは確かだと思う」
「わかりました。そっちの方が安全だし、まずそっちの方に行ってみることにしましょう。能海坊さまはどう思われますか」
花田が能海坊老人に意見を求めた。能海坊老人は、うんとうなずいただけで、そのことについて何も語ろうとはしなかった。何かが、ひっかかっているようにも感じられる。
しかし、なんにせよ事態が大きく動きだしたことに変わりはない。出発は事故にあった時間にあわせて、明朝に決まった。
うまくいけばこれで帰れる。
「ねえさっきから、なにさがしてんの、携帯？」
話しが一段落したところでヒロがエリカに声をかけた。話し合いに参加せず、ずっとリュックの中に手を突っ込んで、ごそごそさがしものをしていた。
「うーん。九ちゃんの喜びそうなもの、なんかないかなあと思って」
シャーペン、お滝まいりのしおり、化粧ポーチ、ハンドタオル、ずらずらと足もとに並べている。
「ママの作ってくれたお弁当さえ腐ってなければなあ。インゲンの牛肉巻きとか、おいしいものいっぱい食べさせてあげられたんだけど」
携帯は？　とたずねると、ストラップのいっぱいついたピンクの携帯を手にして、「どうせ使えないし」。冷静な答えが返ってきた。
ついこの前まで、命より大事だって言ってたのに。

1

第十八話　九兵衛ＶＳヒロ　オリンピック対決

第十八部　九兵衛ＶＳヒロ　オリンピック対決

「ねえちゃん、オリンピックって、そんなにすごいの」
「すごいよ。世界で誰が一番かを決める大会だから」
「世界ってどこ、上方よりも大きい？」
　エリカと九兵衛、洗濯をしながらの井戸端会議が延々とつづいている。宿坊に泊まっている人たちの洗濯ものの量は半端じゃない。エリカと九兵衛が金だらいで洗ったものを、ヒロが絞り、それをわたしが受け取って物干しに干す。四人がかりのリレー形式でしても大変なのに、これをふだんは九兵衛ひとりでやっているらしい。
「よっしゃ、オレっち、ヒロにいちゃんに挑戦して、世界一になる」
　突如九兵衛が奮然と立ち上がった。
「無理無理」
　エリカが鼻でせせら笑った。九兵衛は鼻の穴を大きくふくらませて、ふんっと息を吐いた。
「やってみなきゃわかんないだろ」
　ヒロが最後の一枚を干し終えた。上半身だけで井戸端の九兵衛を振り返り、にやっと笑った。
　うおーっ。九兵衛は両腕曲げて吠えると、見ろといわんばかりに、力こぶでヒロを威嚇してみせた。

　洗濯、掃除、まきわり、草抜き、宿坊の仕事をひととおり終えると、午後みんなで泳ぎに出かけた。竹筒の水筒と、洗ったお弁当箱には、かたやきまんじゅうをたくさんつめた。
　ヒロは、お滝まいりのあと、スポーツクラブに泳ぎに行くつもりだったらしく、リュックには、水着、ゴーグル、バスタオル一式が入っていた。

真剣勝負を挑んできたのは、あんたなんだからね。子どもだからって手を抜いたりしないわよ。それがスポーツマンシップってもんだから。
岸辺で手足をぶらぶらさせながら、ヒロは九兵衛に言う。
山岳修業を甘くみんなよ。九兵衛も負けてはいない。
そこは、直径五十メートルはあろうかと思われる、たわらがたの池だった。ヒロいわく、競泳するにはちょうどいい。
「なんか賭ける？」
「いいよ」
「あたしが勝ったら、ばんごはんのおかず、あんたの分も全部もらうわよ」
「いいよ」
「で、あんたが勝ったら、何がほしい」
「オレっちが勝ったら」
と言って、九兵衛は盛り上がった土手の木陰にすわり、ふたりの戦い心まちにしているわたしたちを振り返った。わたし、エリカ、花田、ハク。そんなのんきなことにつきあってられるかと、ハクは、いつものように午後の稽古をしたがっていたのだが、用心棒がわりについていけと能海坊老人に言われ、しぶしぶながらついてきたのだった。
がんばって、とエリカが九兵衛に手を振った。
「オレっちが勝ったら」
「なによ、さっさと言いなさいよ、どうせそんなこと絶対ありえないんだから」
ヒロが体操服のシャツを脱いだ。見事なまで逆三角形の背中。クォーターパンツを脱ぐと、今まで一度たりとも感情を顔に出すことのなかったハクが、ひどくあわててうつむいた。
九兵衛は意を決したように、エリカに向かって叫んだ。
「もしオレっちが勝ったら、ねえちゃん、ずっとここにいてくれる」
予想もしてなかった言葉が九兵衛の口から飛び出した。エリカも

驚いたようで、大きく目を見ひらいている。なんとか気のきいたことを言って、九兵衛を傷つけることなく、この場の雰囲気をおさめたいが、ふさわしい言葉が何も思いつかなかった。

そのとき、

「九ちゃんがうちにくればいい」

エリカが言った。

「向こうの世界は戦もないし、子どもはちゃんと子どものままでいられるし、ママもパパも、やさしすぎるくらいやさしいから。あたし、ひとりっこだから、九ちゃんみたいな弟ができたら、すごくうれしい。ママもパパも大喜び。だからね、いっしょに行こう。ユニバーサル楽しいよ。九ちゃんみたいな子に、人殺しは似合わないよ。暗くなるまで公園で野球をしたり、宿題忘れて先生に叱られたり、跳び箱七段が飛べなくて悔し泣きしたり、そんな姿だよ。九ちゃんに似合うのは。負けても勝っても、九ちゃんは…」

そこまで言うとエリカは顔を伏せた。言いたいことが痛いほど伝わってきて、自然と涙があふれた。

黙って話を聞いていた九兵衛は、呆然とエリカを見つめていた。九兵衛もまたそんなことを言われるとは予想もしていなかったのだろう。

しばらくぼうっとしていたが、不意に我に返ったようになって、「さっ、にいちゃん勝負だ」と前を向いた。そして、わたしたちには背中を向けたまま、「いまオレっちが言ったことは忘れてくれ」とおとなも顔まけの渋い口調で言った。

九兵衛が無理していることは、十分わかっていた。だけどそれ以上に、もう二度と覆すことのできないであろう九兵衛の強い意志もそこに感じられて、誰もなにも言えなくなった。

エリカが横で肩を震わせている。

「おら、てめえ、こんどにいちゃんっていってみろ、そのときは池の底に沈めてやるからな」

ヒロが九兵衛の頭をぽかっとたたいた。ヒロらしい気づかいだと

思った。重苦しい空気がふわっと軽くなった。

エリカの「よーい」の合図で、ふたりは前かがみになった。ヒロは水泳の選手らしく、九兵衛は陸上の選手みたいに、水上を今にも駆け出しそうなポーズで。

ドン！　でふたりが飛び込んだ。

ヒロは自由形。水しぶきをあげてぶっ飛んでいく。専門はバタフライだと聞いていたが、さすがに速い。自由形八百メートルの近畿大会大会記録保持者だというのもうなずける。

一方九兵衛はというと、水面に浮かんでこない。潜りっぱなしで、五十メートル先の向こう岸まで泳ぎつづけるつもりだろうか。

向こう岸にヒロが先にタッチ。

そのすぐあと、九兵衛が顔を出した。潜水のままで向こう岸までたどりついた。拍手。拍手。すごいとしたいいようがない。いくら達者とはいえ、九兵衛はまだ、たったの七歳なのだ。

向こう岸では、すでにヒロのレクチャーが始まっている。水中の腕の動き、手の抜き方など、手本を示している。

九兵衛はヒロに習ったばかりのクロールで、こっちの岸に戻ってきた。一回レクを受けただけで、すっかりさまになっていて、その運動能力の高さには舌をまく。このままもし現代社会に登場してきたら、どんなすごいアスリートに成長するのだろうか、ふとそんな想像をして惜しい気もする。

「負けた」

顔を出して、九兵衛が潔く負けを認めた。

「四百年後の連中なんて、なんもできないって思ってたけど、ちょっと見直した。カッパみたいだ。にいちゃんのあの泳ぎにはかなわないや」

ヒロはターンして、今度はバタフライで悠々と向こう岸に向かっていた。空はとても青く、澄んだ池の水面には、山並みと巨大な入道雲が映りこんでいた。

1

「あれはなんて泳ぎ？」
「バタフライだよ」
「四百年後の人はみんなできるの？」
「まさか」
四百年後のヒロをのぞく全員、一斉にぶるんぶるんと首を振った。

第十九話　ハクの秘密

第十九部　ハクの秘密

静かだった。戦など、いったいどこの世界の話かと思うほど、穏やかで平和な時間が、ゆったりと流れていた。

「どうしたのハク」

急にハクがむっくりとからだを起こした。子どものおもりがよほど退屈で、ふて寝しているのだとばかり思っていた。

「おーい」

バタフライで向こう岸についたヒロを呼んだ。きょとんとして、ヒロが振り返る。

「次はぼくが相手です」

おもむろに袴をぬぐと、ふんどしひとつになり、肩をぐるんぐるんと回した。

「ハクは本当は真田様の子なんだよ。だけど、生まれてすぐ、能海坊様にあずけられたんだ」

かたやきまんじゅうを歯でくいちぎって、九兵衛が言った。

「え、真田様って、あの九度山にいる？」

と言いつつ、わたしもふたつ目のかたやきまんじゅうに手をのばした。かたやきまんじゅうというくらいあって、本当にかたい。まるで石。だけどかめばかむほどに味が出て、おいしいのかおいしくないのかやくわからない不思議な食べ物でもある。

九兵衛にきくと、作り方は、塩を混ぜた小麦粉を水でのばし、よく練って、それを小判型にして両面を焼いただけだという。日持ちがするので、修行者が何日も山にこもる際に、携帯食として持参するそうだ。

「うん。だけど、ハクがここに連れてこられたのは、まだ九度山送

りになる前のころ。そのころの幸村さまは上田城の城主の御曹司で、でっかい領地をおさめるお殿さまっだんだ」
「なんでまたそれが、こんな遠く離れた小汚い神社へ」
「さあ。理由は知らない。でも、おとなはときどき、公にはできないどろどろした事情を抱えてしまうもんさ」
「へ、、へええ、、、」
「ハクは親のことは何も知らされずに能海坊様に育てられた。オレっちや、ほかの弟子たちといっしょに。それが二年前、突然、真田様から連絡があったんだ」
九兵衛は声を大にして、こぶしをつきあげた。
「息子よ、真田家の名のもとに、徳川に反発する地侍、西軍の残党で作る、隠れ里の豊臣軍を団結させて、指揮をとれって、感じ。
そのときハクは生まれてはじめて、御師の弟子にすぎない自分が、実は真田幸村の血を引くものだと知らされたんだ」
ひどいよね。かたやきまんじゅうを、がじがじしながら九兵衛はつづける。よくみると、前歯が二本抜けていた。
「ハクは親に甘えた経験もないのに、いまごろなんだよ、いったんはハクを捨てといてさ。オレっちには、徳川を打つ、憎む理由がある。大好きなかあちゃんを、とうちゃんを目の前で無残に殺された、根拠がある。だけど、ハクにはそれがないんだ。見ろよ、オレっちの顔の傷。これが証拠だ。これがある限り、忘れちゃなんないことがある。
けどハクにはそれがない。突然、親だからって、戦えって。なんだよそれ。ハクがかわいそうだよな」
九兵衛は池の方に目を向けた。ハクはヒロに何度目かの背泳ぎ競争を挑んでいる。大げさに水しぶきをあげ、だけどヒロの方がだんぜん速い。負けても負けても、ハクは意地になって、やめようとしないのだった。
「しかしまるでガキだね。こんなハク、はじめてみた」
いつも冷静で気高く、人を小ばかにしているようにも感じさせる

ハクにこんな幼い面があったとは、つきあいの浅いわたしですら驚きだった。
いや、つきあいが浅いからこそ、こういう生身の面がさらけだせるのかとも思う。過去も未来もけっしてまじわりあうことのない、行きすがりのわたしたちの前だから、安心して無防備でいられるのかと。
「ふたりとも、もういいかげんして、休憩したら」
エリカが池のかっぱのようなふたりに声をかける。
「そうだよ、おなかすいたよ」
「食べたら、平泳ぎとかいうので、もう一戦」
「えーっもうやだあああああ」
ヒロが悲鳴とともに、ぶくぶくと沈んでいった。

1

第二十話　運命の受容

第二十部　運命の受容

自分の運命をうけいれるということはどういうことなのだろう。そんな問いを、七歳の九兵衛に突きつけられたような気がしていた。

そして、この世には偶然なんてことはなにひとつないという能海坊老人の言葉。

「ムカゴさん」

その声にどきっとなった。

「ハク、さん」

「ハクでいいですよ」

ハクが涼しい顔で言う。だけど、さっきのヒロとの一戦で、鼻の頭だけが蜂に刺されたように真っ赤に日に焼けているので、そんな丹精な顔立ちも台無し、というか、バランスが悪くどこかこっけいでもある。

「わたしもムカゴでいいです」

ハクがにっこりと笑う。

わたしはハクに急速に親しみを感じ始めていた。

「なにをしていたんですか、こんなところで」

「夕日を見てたんです」

本当は、とくに何をしていたというわけでもなく、鳥居の下の階段にすわってぼんやりと考えごとをしていただけだった。思いつきで答え、とりあえず空を見上げた。

夕陽が今まさに西の空に沈もうとするところだった。夕焼け空にたなびく茜雲が、みるみるうちに青や紫に色を変えていく。

「すごいきれい」

思わず感嘆の声をもらした。ハクもまた黙って夕焼け空を眺めている。

「変わらないものってあるんですね」
なぜそんなことを口にしてしまったのか、自分でもよくわからなかった。言ったあとで、急に胸がつまって泣きたくなった。
「行きましょうか。ヒロさんがさがしてましたよ」
「いいんです。友だちをほって朝から闇賭けに出るような薄情者のことなんかほっとけばいいんです。わたし、もう少しここにいたいんです」
ふふっ、とハクの笑う声がした。
「闇賭けは、修業のなかでも、もっとも厳しいといわれているひとつなんですが。それなのに、あの人ときたら」
失礼とことわってから、くっくっくっと肩を震わせた。思いだし笑いが止まらなくなってしまったらしい。どこに行っても、どこの誰からも、ヒロは愛される存在なんだなと思う。そういう意味で、ヒロは本物なんだ。
夕焼けと同じ。
誇らしい、だけどなぜか、さびしいような気持ちもする。
この空の下にいる、わたしはどうしてこんなにちっぽけなんだろう。
「ハク、さん」
「はい？」
「わたし、自分の記憶がないんです」
唐突に言ったのに、ハクはちっとも驚かなかった。
「そうだと思ってました」
「えっ、知ってたんですか」
「なんとなく。あなたには、ほかのみなさんにある色が、最初からなかった」
「色ですか」
「色です。自分では気づきませんが、人はその属性によって、さまざまな色を発しているのです。男女、年齢、生まれた場所、そのほか心の状態も色にあらわれます。その色の重なりや、濃淡によって、

その人の生き様をだいたいですが、おしはかることができます。それがあなたには、ない、というか濁って見えない。最初会ったときは、わざとそうしているのかと思いましたよ」
「自分で色を消すことができるんですか」
「かなり高度な技ですが、鍛錬と積めばできるようになります。例えば、このわたしの名前、ハクというのは、能海坊様がつけてくださった名前ですが、白、つまりどんな色にも染まらぬ、滅私の状態を意味します。常にそういう人物であるようにと。
しかし、あなたにだけ、告白しますが、常にこの境地を維持することは、たぶん死ぬよりもむずかしい」
少し照れたようなハクの笑顔を見て、ふいに池でむちゃくちゃな意地を見せていたハクの一面を思いだして少しおかしかった。
「もし必要ならば、もとの世界に帰るまでに、あなたの記憶を戻すこともできますが」
「ハクは、ハクはどう思う？」
わたしがたずねると、ハクは少し驚いたような顔をした。
心のかたすみに、わたしはずっと考えていた。これは、もしかすると、あの幸せの夢の続きではないのかと。ハクは、もしかするとわたしのお兄ちゃんなのではないのかと。
そんなばかなと思いながら、ハクのほくろに目がいくたび、お兄ちゃんとつぶやきたい衝動をおさえていた。
「あなたは、記憶を消したいんですか」
「たぶん。わたしは、記憶を失う以前の自分を信じられない。どうしても好きになれない。そんな自分のとんでもない過去を背負う自信が、わたしにはないんです」
ハクはわたしのとなりの石段に腰をおろした。頬杖をつき、まっすぐ前を向いた。
「わたしは自分の中にあるありとあらゆる欲望を断つために、つねに滅私を心がけますが、滅私というのは、自分の記憶や過去をすべて消し去ることではないんです。

たとえばムカゴさんは、苦しい記憶を葬り去って新たな一歩を踏み出す人と、苦しい記憶を自ら背負いながら新たな一歩を踏み出す人とでは、どちらの人の方が強いと思いますか？」
当然苦しい記憶を背負って歩く人の方が強いに決まっている。だけどわたしは答えられなかった。わたしは強くない。
「背負ってみませんか」
わたしは首を振った。
「こわいんです」
「だいじょうぶですよ。あなたの運命なんだから、きっと背負える。運命とはそういうものです」
そのとき、突然遠くで奇声が響いた。どりゃあああああああ、山から妖怪でもあらわれたのかと思い、心臓が止まりそうになった。先に振り返ったハクがくすくす笑いだしたので、見ると、わたしたちの泊まっている宿坊の屋根にヒロが仁王立ちで立っていた。
「なにやってんのよ、あんたたち、人があちこちさがしまわってんのに」
「あの人、あんなとこまでジャンプできるようになったんですね」
ハクが小声で耳打ちした。
「昨日、九兵衛君に馬鹿にされたのがよっぽど悔しかったのでしょう。たぶんそれなりに練習をつんで、ジャンプ、ジャンプ」
そう言って、わたしが天井の梁をつかむまねをすると、
「こっちに一緒にいて、ぜひ先鋒隊長にお願いしたい」
「え」
「というのはうそですが」
と言ってハクは大笑いした。
「あ、行きましょう。これ以上怒らせるのはまずい」
ハクが立ち上がって、わたしに向かって手をのばした。
「あなたは、死ぬのがこわくないんですか」
ハクの目をじっと見つめた。あなたはもうすぐ死ぬ。戦に負けて死ぬ。

わたしは真剣に答えを待った。その奥にあるものから、一瞬たりとも目をそらすまいと思った。

「こわくないです」

あっさりとハクは答えた。

だって、あなたはもうすぐ死ぬんですよ、この戦いで豊臣氏は滅亡、以降徳川の太平の世になるんです。のどまででかかった。だから、どこかへ逃げてください。

「わたしは死について考えたことがないんです」

ハクは言った。

「死もまた、生。わたしにとって、死というのは、生の最後の一瞬を意味します。死は単に延長線上にあるもの。それまで生きてきたように、迎えるだけです」

1

第二十一話　出発

第二十一部　出発

翌朝はけたたましい小鳥のさえずりで目をさました。エリカのふとんで眠っていた九兵衛がはっと目をあけて、「ハクだ」と飛び起きた。

外に出ると、ハクが井戸の石積みに腰をかけていた。

「おはよう」

声をかけると、ハクはふいに鼻をつまんで、ツツッピ、ツーツーピー、と高い声で小鳥の鳴きまねをはじめた。すると、その声を合図に、すぐ近くの木々の梢を飛び回っていた小鳥たちが、いっせいにさえずりだした。

まるでダンスでもしているかのように興奮して、枝と枝の間をリズミカルに飛びまわる。どうして。シジュウカラ、メジロ、見れば、わたしでも名前を知っているごくふつうの野鳥ばかり。ハクが鳴くのをやめると、ダンスもさえずりもぴたっとやんだ。

「すごいよハク、鳥のことばがわかるの」

「いえ、言葉じゃなく信号でしょう」

わたしのあとから部屋を出た花田が、妙に納得顔でうなずいている。

「おそらくハクさんは、小鳥のさえずりの中に隠されている信号をよみとって、それを再生しているのです。ツツッツピーピ」

「どういうこと」

寝ぼけまなこをこすりながらヒロがたずねる。

「ほら、よく廃品回収者の音楽や、救急車のサイレンの音に反応して、飼い犬が、妙な遠ぼえすることがあるじゃないですか。犬の中に眠る、かつて群れで生活していたころの本能が刺激されて鳴くんだといわれてますが、それと同じようなものじゃないんでしょうか」

「こんな感じ？」
ヒロが鼻をつまんで、「うお～～ん」と叫んだ。
「だめだめ。見ててよ。小鳥は無理だけど、オレっち、野犬だったら呼べるからね」
「いいいい、野犬はいい」
息をいっぱい吸い込んだ九兵衛を、エリカがあわてて止めた。
「えー、なんで、ほんとにできるんだって」
「いい加減にしろ九兵衛」
エリカにべたべたと甘える九兵衛を、ハクがどなりつけた。
「すぐ出発する。準備しろ」
神庭神社を発つ前に、久保先生のお墓におまいりした。盛り上がった土はまだ生々しく、その上に久保先生がはいていたピンクのプーマと、何も書かれていない木の墓標が一本立てられていた。
このまま、二度とここには戻らないかもしれない。
ヒロがリュックの中に久保先生のピンクのプーマの靴を入れた。
滝の音がなり響いている。そういえば、ご神体の滝を一度も拝んでいなかった。お墓の後ろにそびえる杉木立にはさまれた急な石段をあおぎみた。ずっと先に荒縄を巻いた巨大な岩と、紅白のヒモの下がった神門が見える。
なにげなく視線を落としてはっとなった。一段目のかたわらに、苔むした石像がぽつんぽつんと建っていて、それに目が釘付けになった。
この石像どこかで。
「ああ！」
ヒロが叫んだ。
「花田、エリカ、ちょっとこっち来て。このお地蔵さん、サンショウウオセンターの前にあったやつじゃない」
どれどれ。お地蔵さんを四人で半円形に囲み、呆然と眺めた。
「ほんとだ」
「五日前、ぼくたちはここに九時に集合しました」

「ハハ、ハハハハ。なんかおかしい」
「おかしいね、けど、なにがおかしいんだろ」
「さあ、だけど、おかしいですね」
山岳修業は厳しく、修行中に命を落とす人もたくさんいるという。サンショウウオセンターの自動販売機の横に、ひっそりとあったお地蔵さんは、そういう人たちを弔って建てられたものだったのだ。

1

第二十二話　政治ふたたびあらわる

第二十二部　政治ふたたびあらわる

山上のイワコトサキ岩に向かう途中の深い森の中に、誰が建てたのか、いくつもの祠を目にした。うっそうと茂る樹木の間には、すさまじい霊気が漂っていた。誰もいないのに、じっと誰かに見られているような視線を感じて、なんども背筋がぞくぞくした。

なぜ人々は、わざわざこんな得体のしれない山の中に、修業の場を求めたのだろう。捨て身の覚悟で、その結果、なにをつかみとったというのだろう。

「あれが、闇駆け、最終ポイントのイワコトサキ岩」

見上げると切り立った崖の上に、いつころげ落ちてきても不思議でないような大きな岩がのっていた。人の横顔でいうと、おでこだけがぼこっと飛び出している感じ。

「あの岩の上から、足首をつかまれて谷底をのぞくんだよ」

ヒロがなつかしそうに目を細めた。高さ三百メートルはある。想像しただけで、気分が悪くなった。

「ここからもう少し行ったところに、沼があるんだけど、リュックがあったのはそこなんだ」

沼？　ふといやな予感がした。

空気が急に湿り気を帯びたような気がした。そのすぐあと突如樹木のはえていないひらけた場所に出て、草むらの奥に沼が見えた。

胸が激しくざわついた。

いやな予感はますます大きくなっていく。

そのとき、何かがひゅんと耳もとをかすめ飛んでいった。ひやっとして、後ろを振り返った。

「政治！」

湿気た空気をまっぷたつに切り裂くようなエリカの声が山に響き

1

わたった。

第二十三話　真犯人

第二十三部　真犯人

「いやあ、ごめんごめん。手元が狂った」
何かが飛んでいった方を見ると、それはわたしとヒロが魚捕りに使っていた苦無だった。勝手に政治が持っていってしまった。
「返すよ、それ、もういらないし」
「政治、あんた、今までどこにいたの」
ヒロが叫んだ。
「よお、片山、久しぶりだな。そしてみんなも、元気そうじゃん」
政治はいたってのんきに手を上げた。
「どこにいたのよ」
「あーあエリカ、こんなに汚れちゃって、未来のアイドルが台無しじゃん」
「答えなさいよ。どこにいたの」
「うるせえ、どこだっていいだろ」
政治の目つきは急にけわしくなった。底意地悪そうにわたしたちをにらみつける。気をつけろ、相手はひとりじゃない。ハクが九兵衛に小声でささやいた。わかってる、九兵衛が答える。ふたりが、じりじりと、わたしたちを守るようにじみよってきた。
わたしの目には、政治しか見えない。人の気配も感じない。
「花田」
政治が花田を呼んだ。
「なんでしょう」
「あれを出せ」
「あれとは」
「歴史の参考書だよ。あれがいるんだよ」
「そんなもんどうすんの」

ヒロがきいた。
「知りたいか、なら教えてやるよ。俺様はこの時代で生きていくことにした。この時代で神になる。予言者になって、世界に君臨するんだ」
「なにいってんの。気でも狂ったの」
「なんとでもいえよ。花田はやく」
「だめです。能海坊様と約束したんです。この時代の川に石を投げこむようなまねをしてはならないと」
「そうだよ、アホなこと言ってないで、いっしょに戻ろう」
「だめだだめだだめだ。俺は帰らない、あんな世界に誰が戻ってやるか」
「なんで」
「おやじも、みんな、だいっきらいだからだよ。俺の人生なんだ。俺の人生なんだぞ。それなのに、あいつら、俺が生まれる前から、よってたかって勝手にレールを敷きやがって。ちくしょう。おまえには政治家としてのセンスがないだの、知恵がないだの、いつもむちゃくちゃ言いやがって。
だから事務所に火をつけたんだ。お滝まいりに出る前。仕事ができなくなりゃいいんだ。全部燃えて、あとかたもなくなくなっちまえばいいんだ」
政治は捨て鉢に言い放った。
「ま、まさか、橋に火をつけたのも、政治、あなたなの」
エリカのくちびるは真っ青でわなわなと震えていた。
「そうだよ、俺だよ。悪かったな。だけど、しかたなかったんだ。血相変えて久保が追いかけてきやがったから。事務所に火をつけたのがばれたんだと思った。だからとっさに、残りのガソリンをまいて、マッチで火をつけた」
「マッチって、でもどうしてそれを、ムカゴが」
心臓がばくばくしていた。その先を知ってる。こわい。わたしは思いだしかけている。真実を知るのがこわい。知りたくない。

「俺が橋に火をつけた直後に、そいつが勝手に、俺の手からマッチを奪ったんだ」
「ムカゴ、どうしてそんなことを」
みんなの視線がわたしに集まった。事情をよく知らないハクでさえ、息をのんでわたしを見つめている。ぶるぶると首を振った。それ以外なにもできない。からっぽだった頭に、あまりにいっぺんのことが流れ込んできたせいで頭が混乱していた。
気がつかないうちに、後ろに下がっていた。
「どっちにしても、もう俺には関係ないことだ。俺はもう向こうの世界にはもどらないんだからな。よこせ、花田」
花田もわたしと同じように、じりじりと下がってきた。
「だめよ、政治もいっしょに帰るの。久保先生に誓ったんだから」
「うるせえ。早くしろ。でないと全員ぶっ殺すぞ」
「殺すって、政治、だましたわね」
「あれ、今ごろ気づいたの？　片山の脳の筋肉もたいしたことないね」
「どういうこと」
エリカがたずねる。
「こいつ、リュックを使ってあたしたちをここにおびきだしたのよ。まんまとひっかかった」
「でも、このリュック」
「こんなもの、最初の日にさがしに出たとき、とうに見つけてたんだよ。でも隠してた。そこんとこ、自分でもよくわからないけど、エリカ携帯持ってたし、少しでも発見を遅らせたいとか、そんな意識がはたらいたのかもしんないな」
「ひどい」
「でも、まさか、二度と発見されっこないこんなところまで逃げられるとはね。予想外」
「じゃ、あんただけいればいいわよ、あたしらは帰るから」
「どうぞ、その前に」

1

政治が手を伸ばす。
「だめです。これはぼくの受験用の参考書です。絶対わたせません」
「めんどくせえええ、全員死ねや」
政治が口にしたそのとき、草むらがざざっと波うった。

第二十四話　戦闘

第二十四部　戦闘

「なにもの」

目にも止まらぬ速さで九兵衛が何か取り出した。鎌だ。草刈りにも使っていた折たたみ式の鎌。左右一本ずつ手に持ってしゃきんと刃をたて、さっと低く身構えた。

草むらからぬっと姿をあらわしのたのは、だらしなく胸をはだけた着物姿の男たち。後ろ、前、横に、三人。後ろにいたいちばん背の高い男が、わきざしの刀をすらっと抜いた。次の瞬間、ひゅんと音がして、人の首の太さほどもある太い枝がぼとっと落ちた。

それを見ていた別の男が、キヒョッっと獣のような声をあげた。ずんぐりしたからだで、鼻が右に曲がっていた。わたしたちに向き直ると、手に持っていた鎖のついた鎌をじゃらじゃらさせながら、舌なめずりをした。

もうひとりは、さらに不気味なせむし男だった。片方の眼球が真っ白で、ピン球をはめこんだように飛び出していた。両手に熊の爪のような鋭い鉤のついた手甲をはめていた。

絶対わたすなよ。ヒロが花田に声をかける。

わたさないわたさないわたさない、ぶるぶると震える声で花田が繰り返す。

「じゃあこっちからいただきにあがるまで。行け」

政治が男たちに命令した。

男たちのからだが前にゆらりと動いた。

わたしたちはひとかたまりになって、じりじりと後ろに下がった。からだの芯から震えがくる。心臓から冷たい汗が噴き出しているような気がした。

もうあとがない。すぐ後ろは沼。水草がびっしり浮いて水面が見

えない。
「ここは底なし沼だぴょーん。下がれ、下がれ」
ひひっと歯をむきだして、政治はうさぎのようにはねた。
男たちは獲物を追いつめるのを楽しむかのように、一歩一歩近づいてくる。九兵衛はそんな男たちとわたしたちの間に立ち、鎌を持つ手を鳥の羽のように広げている。
「きゅ、九ちゃん」
驚いたことに、エリカを振り返った九兵衛の顔は笑っていた。黒目がちの澄んだ目で、エリカをじっと見つめていた。
「だいじょうぶだよ。きっと守ってみせる。今度こそ」
あっと思った。止めなきゃ。九兵衛が前を向いた。鎌を持ち替え、腕を十字に組んだ。
かあちゃん。
ほんの一瞬だけ、九兵衛がエリカを振り返って、そう呼んだ。耳に届くか届かないかの小さな声。だけど耳に届いたときには、もう飛び出していた。
うおりゃあああ、大木をまっぷたつに切り裂くような気合いの声が山間に響きわたった。「げす野郎、ついてきやがれ。オレっちが切り刻んでやる」
九兵衛は、ものすごい速さで横向きに、別の場所に移動していった。三人が犬のようにあとを追った。
「九ちゃん、九ちゃん」
エリカが狂ったように叫ぶ。
九兵衛は沼の北側まで行って止まり、男たちと向き合った。みらみあう。九兵衛は沼を背に、男たちの頭上にはイワコトサキ岩が見える。ぼうぼうに茂った夏草が九兵衛の胸までおおっていた。
「おもしれえ、K―1なんか目じゃないし、特等席でただで見ようっと」
政治はそう言うと、九兵衛たちのいる方に移動して行って腰をおろした。あれ、と思って目をこらした。政治のからだ全体が、何か

黒い影のようなものでおおわれている。
なんだろう。それは汗や冬に吐く白い息のように、政治の内部から沸いて出たもののようにも見えるし、まったく別の何かに政治がとり憑かれているようにもみえる。
じっと見ていると、その黒い影のようなものは、あっというまに、周囲に広がっていった。
まるで乾いた山に放たれた火の粉のように、いったんおおわれると、草木や昆虫も、ことごとく枯れ、干からびて死んでいく。大きなカエルが、白い腹を見せて、沼にぷかんと浮かび上がってきた。
やだ、なにこれ、気持ち悪い。
それは、ざわざわと音をたててわたしの方に近づいてきた。
やだ、あっちに行って、足が動かない。
助けて。
助けて、お兄ちゃん。

1

第二十五話　よみがえった忌まわしい記憶

第二十五部　よみがえった忌まわしい記憶

「向井さん、かわいそうに。ショックで、立ちあがることもできないんだって」

「もともとそう丈夫じゃないって話してたもん。本当は、ふたりめの出産も医者に止められてたんだって」

「やめておけばよかったのにね。和子ちゃん、生むの。そしたらこんなことにならずにすんだのに」

「悠馬くん、いい子だったもんね。やさしくて、頭もよくて」

「まさか、こんなことになるなんてねえ」

顔をあげると、おばちゃんたちと目があった。となりにすわっているのは、お兄ちゃんのクラスの佐伯君と三並さんだ。中に入りきれずに、外でお線香の順番を待っている六年生もいっぱいいる。みんな泣いている。みんなわたしを恨んでいる。わたしがお兄ちゃんを殺したから。わたしだけ生きているから。

ふたり乗りはしちゃだめよって、おかあさんにあんなに言われたのに。お兄ちゃんもいやがってたのに。それなのに、わたしが無理に頼んで、お兄ちゃんの自転車のうしろにのせてもらったから。

ローソンの前の信号のない四つ角を曲がった瞬間、自転車のバランスが崩れた。わたしがみっちゃんに手を振ったから。自慢したかったから。生徒会長で人気者のお兄ちゃんを独占してるのが、うれしかったから。

道路に倒れ込んだとき、トラックが突っ込んできた。お兄ちゃんのからだが自転車ごとぽーんとはねあがるのを見た。その向こうに広がる空がこわいくらい青かった。そんなことを感じているわたしはまったく無傷だった。

本当は生きてちゃいけないんだ、わたし。

笑っちゃいけないんだ、わたし。
アトピーになって、顔がずるずるになっていったのは、神さまの罰がくだったから。当たり前だ。だって、わたしはみんなの宝ものだったお兄ちゃんを殺してしまったんだから。
ごめんなさい。
どうしたらいい。
ごめんなさい。
どうしたらいい。
ごめんなさい。
この世界で生きているのが、つらいです。
消えてとけて、なくなりたいです。
死なせてください。
ふうっと力が抜けたその瞬間、突然足をつかまれた。黒い影から飛び出した二本のどろどろの手。ずるずると影の中に引きずり込まれる。心はひどく空っぽで、抵抗する気力もない。何もかももうどうでもいい、どうにでもなれ。
そのときだった。どこからか、不思議な声が聞こえてきた。

ソロエナラベテ　イツワリサラニ　タネチラサズ
イワイヲサメテ　ココロシズメテ

誰？　お兄ちゃん？
違う、ハクだ。この声はハク。

ソロエナラベテ　イツワリサラニ　タネチラサズ
イワイヲサメテ　ココロシズメテ

1

第二十六話　オン　マリ　シエ　ソ　ワカ

第二十六部　オン　マリ　シエ　ソ　ワカ

はっと我に返った。
うとうとしている耳もとで、風船をぱんと割られたような感じ。
そうだ影。あわてて周囲をみまわした。影なんかどこにもない。
あいつに足首をつかまれたと思ったのに。どこかに引きずり込まれるようないやな感触だけが生々しく残っている。
「ちょっとだいじょうぶ」
ヒロがかけよってきた。
「なにやってんの」
「わ、わたし」
「呼んでるのにかたまって動かないから、立ったまま気を失ってんのかと思った」
「影、さっきの声」
「なにいってんの、早く。こっちよ」
強引にヒロに腕をひっぱられた。見ると、沼から少し離れた雑木林の中に、エリカと花田が立っていた。
「急いで」
「だって」
「ハクがあそこで待ってろって言ったでしょ」
ハク。名前を耳にしたとん、さっきの声がよみがえった。
ソロエナラベテ　イツワリサラニ　タネチラサズ　イワイヲサメテ　ココロシズメテ
あの不思議な呪文。心の奥にじかに響いて、得体のしれないどろどろの影を追い払った。
ハク、ハクはどこ。
「ハクならあそこよ」

ヒロの腕がまっすぐに沼の中央をさした。のどがひくっとなった。水草にびっしりと埋めつくされた沼の上にハクが立っていた。両手の中指と薬指をあわせて手を組んだ姿勢で、まぶたをしっかり閉じ、その顔は九兵衛たちの方に向けられていた。

オン　マリ　シエ　ソ　ワカ　オン　マリ　シエ　ソ　ワカ

ハクのくちびるが動いている。声は風のように細くかすかだけど、繰りかえしそう聞こえる。オンマリシエソワカ。

九兵衛と三人の男たち。にらみあったまま微動だにしなかった均衡がいつしか崩れていた。鼻の曲がった男は鎖鎌をぶんぶん振り回し、九兵衛の距離は確実に縮まっていた。

「九ちゃんが」

「だめ。ここはハクにまかせるの。早く」

服をひっぱられ、引きずられるようにみんなのもとに連れていかれた。

「おまえら、逃げるなよ　ひいっひっひっ」

政治が石をつかんで放り投げた。両足をばたばたさせ、腹を抱えて笑ってる。政治は完全に狂ってる。いつから狂ってたんだろう。

がしゃっと音がした。はっとして見ると、九兵衛の左の鎌に、鎖が巻きついていた。鼻の曲がった男が、鎖をぎりぎりとたぐりよせる。九兵衛が引きずられる。九兵衛が鎌から手を離した。男がよろめいた。その一瞬のすきに、九兵衛はジャンプして、男の背後にまわった。九兵衛が鎌を振り上げる。しかし男の動きの方がほんの少し早かった。太い鎖が、ぶうんと音をたて宙を舞った。

「九ちゃん、危ない、うしろ！」

エリカが叫んだ。ぎりぎりのところで、九兵衛が飛んだ。鎖の先についた鉄のかたまりが、ずしんと地面にめりこんだ。九兵衛が体勢を整える。両手で鎌をしっかり握りしめ、低く身構えた。

ハクは目をつむり、ひたすら真言を唱え続けている。密度の濃い空気がハクを取り囲んでいるのを感じた。この世界にみちているあらゆる気、あらゆるエネルギーが、ハクのもとに集まっている。

そのとき、ごごごごご、と猫がのどを鳴らすような音とともに、かすかなな振動が足もとから伝わってきた。
「じ、地震だ」
花田が騒ぎ出した。
「見て」
と言って、ヒロが顔を上に向けた。はるか頭上のイワコトサキ岩がぐらぐら揺れていた。エリカがひっと叫び、それっきり言葉を失った。
もしあのままころがり落ちてきたら、あの巨大なイワコトサキ岩は沼に突っ込む。
まさか、それがハクの唱えている真言の狙いなのでは。
鎖鎌のたび重なる攻撃に、九兵衛の息があがってきていた。鎖の片方には鎌、もう片方には鉄の玉。その両方がクロスして同時に飛んでくることもあった。得意のジャンプも目に見えて反応が遅くなり、鎖に足をとられるのは時間の問題かもしれない。しかも、そのうしろには、ピンポン球の男と、刀男のあとふたりも控えている。
あやふやだった思いが、確信につながっていく。
男たちと政治は、切り立った崖を背にしている。だから、その上のイワコトサキ岩がぐらついていることを知らないし、まさかそんなことになっているとは夢にも思ってないはずだ。
ハクの額に大粒の汗がびっしり浮かんでいる。それが、遠く離れているわたしにも見える。
「わたしたちも祈るのよ。ハクに力をかすの」
見よう見まねでハクがしているのと同じ形に手を組んだ。人さし指以外の感覚が驚くほど鈍く、右と左の指がこんがらがる。もどかしくいらいらしていると、「これからどうすんの」、ヒロが言った。しっかり組めてる。身体能力の差をこんなところでも痛感する。
「オン　マリ　シエ　ソ　ワカよ。イワコトサキ岩に全神経を集中させて」
「わかった。オン　マリ　シエ　ソ　ワカね」

ヒロは一度だけ繰り返し目をつむった。
オン　マリ　シエ　ソ　ワカ　オン　マリ　シエ　ソ　ワカ　オン　マリ　シエ　ソ　ワカ　オン　マリ　シエ　ソ　ワカ
花田の声がヒロの声にかぶさって、そのふたりの声に、さらにわたしの声がかぶさる。閉じたまぶたの裏側に、正確に言うと、目と目の間にある部分に、不思議な形に組んだ自分の手が浮かんでいて、その指の先の一点を、わたしの中にあるもうひとつの目が見つめていた。
いつしかわたしは、イワコトサキ岩の中に入り込んでいた。イワコトサキ岩の中はがらんどうで、暗く、まるで宇宙に浮かんでいるようだった。わたしは、オン　マリ　シエ　ソ　ワカと唱えつづけた。わたしは、宇宙のひとかけらだった。
来る、はっきりそう感じた。かっと目をみひらくと、今まさにイワコトサキ岩が、高さ数百メートルの崖の上から、ころげ落ちようというところだった。
次の瞬間、大地をまっぷたつに引き裂くような轟音が、耳をつんざいた。イワコトサキ岩がころがり落ちてきた。バキバキと樹木をなぎ倒し、大地を踏みつけ、一直線に政治たちのいる方に向かう。なぜかそれが、怒り狂った鬼が山を駆け下りている姿とだぶって、ぶるぶるっと震えがきた。
横で見ている花田の口が顎が外れたのかと思うほど、だらしなくひらいている。
高くはねながら、ハクが沼から戻ってきた。来るとすぐ、わたしと花田を両腕に抱え、高く飛んだ。二、三度衝撃があって、気がついたときには、木の上だった。そおっと下をのぞくと、樹上を見上げているヒロの顔が粒のように小さくて、あわてて木の幹にしがみついた。
「ここから動かないで」
ハクが言った。反対側から幹にしがみついている花田の歯ががちがちとなっている。動けといわれても、わたしたちには絶対無理。

ヒロは？　と思って下を見ると、すでにその姿はなかった。いつのまに飛んだのか、別の木のほぼ同じ高さの枝にしっかりと立っていた。すごい。完全にわざを身につけたのだ。ヒロがどうって感じで親指をたてた。

沼の方で悲鳴が聞こえた。九兵衛に気をとられていた男たちが、ようやく自分たちに向かってころがり落ちてくる巨岩に気づいた。だけどもう間に合わない。九兵衛は、あわやというところで跳躍し、ころがり落ちるイワコトサキ岩をさけて、そのあと別の木の上に逃れたが、逃げ場を失った政治と男たちは、あわてふためき沼に飛び込んだ。

「政治！」

ヒロが叫んだ。

「うわあああああ、助けてくれー」

びりびりとしびれるような政治の絶叫が、木の上にいるわたしの足もとまではいあがってきた。

その瞬間、ヒロが飛び降りた。

「だめっ、間にあわない、ヒロもいっしょに死んじゃう」

ヒロが空中でくるっと一回転した。いまにも泣きだしそうなわたしに、Ｖサインをして見せたように思ったのは、目の錯覚だろうか。

「死もまた生。最後まで自分らしくあるのが、生きるものの務め」

その声にはっとなってハクを振り返った。すべてを許す微笑みで、ハクがわたしにうなずいた。

うん、とわたしもうなずいた。

オン　マリ　シエ　ソ　ワカ

木の上で、腕をいっぱいに広げた。わたしは宇宙のひとかけら。たったひとりのわたし。

オン　マリ　シエ　ソ　ワカ

ヒロのあとを追って、わたしは飛んだ。宙をまっているとき、イワコトサキ岩が沼に突っ込むのが見えた。どおんという衝撃音とともに、突然大地震に見舞われたように神庭山全体が揺れた。視界が

激しくブレた。
目をあけてもとじても同じだった。暗くて長いトンネルをどこまでも落ちていくような感覚だけがあった。
わたしはせいいっぱい、腕をのばした。
「この手をつかんで。みんなで、生きて帰ろう」

1

第二十七話　明日の予感

第二十七部　明日の予感

ここはどこだろう。
樹木がいっぱい生い茂っている。
重なり合う小枝や緑の葉っぱ。そのすきまをぬって届く太陽の光がとてもまぶしい。
なにも思いだせない。
あれ？
「ムカゴ？」
ヒロ？　なんで。目をあけたわたしのすぐ上に、おおいかぶさるようなヒロの顔があった。
「先生、ムカゴ、気がついた」
ヒロが叫んだ。はっとして身を起こし、びっくりした。わたしは休憩用のベンチに寝かされていて、そのわたしのそばに、ヒロ、エリカ、政治、そして少し離れたところで、花田があの参考書をひらいている。
ベンチの裏にあるログハウス風のトイレから、タオル片手に誰かがあわてて飛び出してきた。久保先生だ。ピンクのプーマの靴で階段を駆け下りてくると、ベンチの前にしゃがみ、心配そうにわたしの顔をのぞきこんだ。
「向井、だいじょうぶか」
久保先生は濡れたタオルを、よっつにたたんで、わたしの頭にぽんとのせた。はいと一応うなずく。顔がかゆくてたまらない。手で触れると、ざらざらしていた。
「横になってろ。もう消防隊がつくころだと思うから」
状況がよくのみこめない。
ベンチのすぐ向こうに、政治が燃やしたはずの橋が見えた。橋の

下は深い渓谷になっていて、ごつごつした岩と、流れの速い川が見える。
「あの、先生、いま、何年何月何日ですか」
わたしが声を出すと、みんなびっくりしたように、いっせいに振り返った。
目をまん丸にして、花田なんか参考書をひらいたまま顔だけこっちに向け、ふくらんだ鼻をぴくぴくさせている。演技にしてはうますぎる。わたしがしゃべれるようになったことを、みんなまだ本当に知らないのだ。
「平成十八年八月二日だが」
耳にした瞬間、驚きとおかしさの両方が入り混じった、不思議な感情にとらわれた。
「よかった。本当によかった。ムカゴが助からなかったら、俺」
突然政治が泣きだした。わたしを見て、うれしそうなのに、ぼろぼろと涙をこぼしている。そんな政治の肩を、久保先生がうしろからかばうように抱いた。
「消防の人が来たら、俺、正直に全部話すよ。おやじの事務所に火をつけたことも、橋を燃やそうとしたことも、ムカゴがそれを止めようとして、命がけで火に飛び込んでいったことも、ちゃんと言うよ。ありがとうムカゴ、俺、どうかしてた、おまえのおかげで目がさめた」
そうか、そうか、久保先生は政治をいつくしむように、なんども繰り返し頭をなでた。
「ムカゴ」
エリカがわたしを呼んだ。
「なに」
「勇気あるんだね」
それだけ言うと、照れくさそうにくちびるをへの字に曲げた。
「なにそれ。さっき言ってたのと全然違う」
ヒロがあきれて、エリカを腕でつついた。

「ムカゴはすごい勇気のあるやつだ、いじわるして悪かった、もし気がついたら、今までのことあやまる、それでとっておきのスキンケアの方法を教えるんだとか、言ってたじゃない。ほれ、ごめんねって、言わなきゃ伝わらないよ」

「あれれ、とかなんとか言って、結局全部、言ってしまいましたね」

花田が言うと、みんなどっと笑った。

わたしもいっしょになって笑った。

本当は言わなくても十分伝わっていたんだけど。

人の心の奥には、言葉にならないいろんな感情が潜んでいて、なかには、正面から向き合うにはあまりにもつらく消したいほど悲しい思いもあるけれど、だけどその底にはきっと、人を思う優しさや、自分を裏切らない誠実さや、命の尊さを知る謙虚さといった感情もいっしょに横たわっている。

それらを全部ひっくるめて、ひとりの人間なんだ。

わたしもエリカも。

もうだいじょうぶ。わたしは信じている。

「立てるか」

久保先生が言った。だいじょうぶです、と答えて立ち上がった。

「じゃあ、お地蔵さんのところまでみんなで戻るか」

遠くで救急車のサイレンの音が聞こえていた。

帰ったらお兄ちゃんのお墓まいりに行こう。そのとき唐突にそう思った。

お兄ちゃんの生きられなかった分と、わたしの分と、たして十倍したくらいの気持ちで明日から生きていくから。

お兄ちゃんはきっと笑って、がんばれよって答えてくれるだろう。

ハクとそっくり同じ、あのすべてを許す微笑みで。

1

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8021c/

オンマリシエソワカ

2010年10月8日13時39分発行